年報

津山弥生の里

第21号

津山弥生の里文化財センター

年報 津山弥生の里

第21号（平成２４年度）

2014

津山弥生の里文化財センター

目　次

機構図及び職員配置・例言　ii

第Ⅰ部　津山弥生の里文化財センター事業概要 …… 1

Ⅰ－Ａ　展示事業 …… 3
Ⅰ－Ａ－１　入館者数 …… 3
Ⅰ－Ａ－２　啓発、普及活動 …… 3
Ⅰ－Ａ－３　寄贈資料 …… 4
Ⅰ－Ｂ　文化財センター日誌抄（平成 24 年度） …… 5
Ⅰ－Ｃ　埋蔵文化財発掘調査 …… 7
Ⅰ－Ｃ－１　平成 24 年度届出関係一覧 …… 7
Ⅰ－Ｃ－２　現地説明会 …… 8

第Ⅱ部　調査の概要 …… 9

Ⅱ－Ａ　市内遺跡試掘・確認調査報告 …… 11
Ⅱ－Ａ－１　旧津山藩別邸庭園（衆楽園）確認調査 …… 11
Ⅱ－Ａ－２　中原遺跡確認調査 …… 13
Ⅱ－Ａ－３　下横野三宅池頭遺跡確認調査 …… 16
Ⅱ－Ａ－４　大田土居之内遺跡確認調査 …… 18
Ⅱ－Ａ－５　美作国府跡確認調査 …… 19
Ⅱ－Ａ－６　地蔵二つ塚古墳測量調査 …… 20
Ⅱ－Ａ－７　大日古墳測量調査 …… 22
Ⅱ－Ｂ　クリーンセンター建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 …… 24

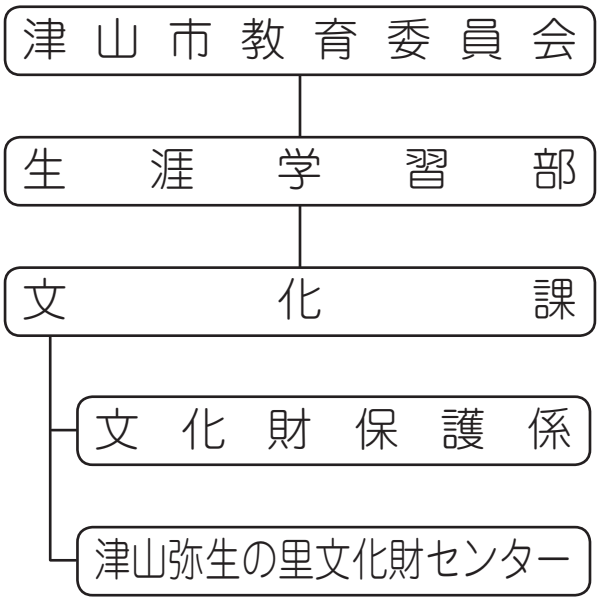
第Ⅲ部　文化財の保護・管理 …… 27

Ⅲ－Ａ　文化財の保護 …… 29
Ⅲ－Ａ－１　文化財保護委員会 …… 29
Ⅲ－Ａ－２　新指定の文化財 …… 29
Ⅲ－Ａ－３　文化財防火訓練 …… 29
Ⅲ－Ｂ　指定文化財の保存管理 …… 30
Ⅲ－Ｂ－１　国指定文化財 …… 30
Ⅲ－Ｂ－２　県指定文化財 …… 30
Ⅲ－Ｂ－３　市指定文化財 …… 30
Ⅲ－Ｂ－４　その他の文化財 …… 30
Ⅲ－Ｃ　歴史民俗資料館の管理運営 …… 30
Ⅲ－Ｃ－１　加茂町歴史民俗資料館 …… 30
Ⅲ－Ｃ－２　勝北歴史民俗資料館 …… 30
Ⅲ－Ｃ－３　久米歴史民俗資料館 …… 30
Ⅲ－Ｃ－４　阿波民具館 …… 30

第Ⅳ部　資料紹介・研究ノート …… 31

Ⅳ－Ａ　美作加茂町万燈山古墳出土の梔子形空玉について …… 33
Ⅳ－Ｂ　院庄の御茶屋について …… 40
Ⅳ－Ｃ　美作の狛犬（５） …… 47

平成 24 年度機構図及び職員配置



課　長　竹内　清起（文化財センター所長兼務）
主幹・文化財保護係長
　　小郷　利幸（同次長兼務）
主　査　仁木　康治（同主査兼務）
主　任　豊島　雪絵（同主任兼務）
主　任　平井　泰明（同主任兼務）
主　事　仲井　寛明（同主事兼務）
嘱託員　田渕千香子
　〃　　春名　博美
　〃　　宗本　節子

例　言

1．本書は、津山市教育委員会文化財課が平成 24 年度に実施した事業概要などについてまとめたものである。
1．平成 24 年度の埋蔵文化財発掘調査は、小郷利幸、仁木康治、豊島雪絵、平井泰明、仲井寛明、出土遺物の整理は上記の他、田渕千香子、春名博美、宗本節子が担当した。指定文化財の保存管理事業は仲井寛明が主として担当した。本書の執筆は各担当者が行なった。
1．本書のデータは、ＰＤＦフォーマットで保管している。

第Ⅰ部
津山弥生の里文化財センター
事　業　概　要

A. 津山弥生の里文化財センター展示事業

1．入館者数

昨年度の入館者数は下表のとおりである。

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
大人	48	97	126	108	93	35	45	58	27	61	50	79	827
学生	16	408	88	70	70	7	26	236	8	300	156	33	1,418
合計	64	505	214	178	163	42	71	294	35	361	206	112	2,245

表１　平成２４年度総利用者数内訳

2．啓発、普及活動

【刊行物】

『年報　津山弥生の里　第 20 号』

『院庄構城跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第 82 集

【講演会】

第 31 回津山市文化財調査報告会（参加者 104 名）

日　時　平成 25 年３月３日（土）

場　所　グリーンヒルズ津山　リージョンセンター

内　容

研究報告１

「クリーンセンター建設に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告」

津山弥生の里文化財センター　平井泰明

研究報告２

「美作国絵図の描画内容の変遷

～正保・元禄・天保国絵図の比較検討～」

津山郷土博物館　小島　徹

講演「戦国山城の見方・歩き方」

滋賀県立大学　中井　均　先生

【外部講演】

開催日	演　　題	講師	会場、参加者
4/22（日）	「津山城の整備について」	豊島雪絵	美作教育会館、70名
6/2（土）	「美作国分寺跡」	小郷利幸	美作大学、80 名
6/10（日）	「美作国の建国前史」	小郷利幸	コミュニティセンターあいあい、30 名
8/17（金）	「美作国建国 1300 年について」	小郷利幸	勝北公民館、14 名
10/23（火）	「美作国建国前史」	小郷利幸	清泉公民館、40 名
11/4（日）	「院庄館跡」	仁木康治	院庄公民館、40名
3/1（金）	「美作国建国 1300 年の歴史と記念行事について」	小郷利幸	コミュニティセンターあいあい、9 名
3/3（日）	「高田地域の遺跡と文化財」	仁木康治	高田公民館、30 名

【研究会】

美作考古学談話会（会員 15 名）

	日時	演　　題	講師	参加者
第１回	5/19（土）	「古代美作の特色とは」	仁木康治	10 名
第２回	8/25（土）	「製塩土器をつくる」	豊島雪絵	4 名
第３回	9/29（土）	「製塩土器で、塩をつくる」	豊島雪絵	6 名
第４回	12/22（土）	「陶棺の基礎講座」	平井泰明	10 名
第５回	1/12（土）	「美作の首長墳と小墳」	小郷利幸	8 名
第６回	3/30（土）	「考古学と馬について」	仲井寛明	4 名

【速報展】

発掘調査速報展

『津山の歴史を掘る－回顧展－』

・中宮１号墳：須恵器、土師器、円筒埴輪、鉄鏃、馬具（轡、鐙、雲珠、鏡板）、小玉（土製、ガラス製）

・六ツ塚古墳群：須恵器、土師器、円筒埴輪、小玉（ガラス製）

【収蔵資料の貸し出し・調査等】

資料名	相手方	期間	貸し出し理由
十六夜山古墳埴輪５点	岡山県立博物館	H24.4.1 ～ H25.3.31	平常展
綿クリ機、座繰りほか 26 点	作州絣を育てる会(日名川茂美)	H24.4.11 ～ H25.3.31	作州絣講習会
火おこし機　3 点	個人	H24.5.8 ～ H24.5.20	授業
大山みち資料	個人	H24.5.7 ～ H24.10.7	調査
有本遺跡ガラス管玉 12 点・特殊器台 4 点	岡山県立博物館	H24.9.28 ～ H24.12.7	特別展「邪馬台国の時代―吉野ヶ里から唐古・鍵、纒向まで―」
紺糸縅二枚胴具足　烏帽子形兜付一式	館林市教育委員会・館林市第一資料館	H24.9.18 ～ H24.11.16	特別展「館林藩を支えた領地―越智松平家と播州三木の歴史―」
石うす１点	東小学校	H24.9.16 ～ H24.9.21	授業
横野和紙制作ＤＶＤ	北陵中学校	H24.10.2 ～ H24.10.25	授業

山ノ奥遺跡・野村高尾遺跡・大田茶屋遺跡・大田大正開遺跡・荒神峪遺跡・宮尾遺跡・法事坊遺跡・倭文東地区黒曜石計 18 点	明治大学黒耀石研究センター	H24.11.20 ～ 25.1.31	学術研究
蓄音機２点、レコード１箱、糸車１点、	個人	H24.11.2 ～ H24.11.6	作州城東まつり
カメラ、わら靴、千歯、竹そり、安全炬燵、猫足膳、かま、アイロン、桶、ざる各１点	佐良山小学校	H25.1.28 ～ H25.2.4	授業

【収蔵資料の特別利用】

申請者	資料名	利用内容	出版物等
山陽新聞社	美作国府跡・国分寺写真	画像掲載	山陽新聞朝刊（平成 24 年 4 月 13 日・19 日付け）掲載
個人	荒神峪遺跡銅釧、銅鏃	写真撮影	青銅器研究
岡山県総合政策局	中山神社写真	画像掲載	都道府県展望 5 月号
個人	日上天王山古墳銅鏡、近長丸山１号墳銅鏡	熟覧	学術研究
個人	コウデン２号墳２号陶棺・クズレ塚古墳陶棺・荒神西古墳１号陶棺・釜田２号墳陶棺・田邑古墳陶棺写真	画像掲載	学位請求論文
神社本庁広報センター	高野神社社殿・木造随身立像写真	画像掲載	週刊『神社新報』
個人	在来犂写真	画像掲載	神奈川大学経済学会紀要『商経論叢 47 巻 3・4 合併号』
個人	有本遺跡管玉、荒神峪遺跡小玉、西吉田遺跡小玉・管玉	写真撮影	学術研究
岡山県立博物館	有本遺跡Ｂ地区全景写真	画像掲載	特別展「邪馬台国の時代―吉野ヶ里から唐古・鍵、纒向まで―」
山陽新聞社	津山城古写真	画像掲載	山陽新聞朝刊（平成 24 年 9 月 22 日付け）掲載
美作市企画振興部	美作国府の想像図	画像掲載	『広報みまさか』平成 24 年 12 月号
岡山県古代吉備文化財センター	美作国分寺跡 PL.3・11-2 写真	画像掲載	同センターホームページ
個人	長畝山北１～９・11 号墳出土土器	熟覧	学術研究
個人	十六夜山古墳出土須恵器・銅銭・動物遺体ほか	熟覧	研究
倭文地区歴史と文化を語る会	七ツ塚古墳群・鉄穴流し遺構全景・荒神西古墳出土遺物・大蔵池南製鉄遺跡写真	画像掲載	案内看板「稼山の史跡」
岡山県県民生活部	美作国分寺跡出土瓦写真	画像掲載	『美作国紀行』
株式会社碧水社	津山城航空写真	画像掲載	『今むかし　日本の名城 88』平凡社
川越市立博物館	津山城写真	写真展示	市制施行 90 周年記念
株式会社碧水社	津山城航空写真	画像掲載	『日本の城データファイル』(株) ディアゴスティーニ・ジャパン
株式会社北鉄航空	津山城写真	画像掲載	旅行企画募集パンフレット
株式会社碧水社	津山城航空写真	画像掲載	『日本の城』10 号（株）ディアゴスティーニ・ジャパン

３．寄贈資料

下記の方から資料の寄贈がありました。寄贈いただいた資料は文化財センター資料として保存活用させていただきます。（敬称略）

寄贈者	寄贈資料
北小学校	糸車１点、糸まき取り機１点、同部品４点、電話２点、うどん製造機１点、温度計１点、機織り道具３点、繭毛羽取り機１点、ミニチュアミシン１点、幻燈機１点、時計１点
個人	校章（矢筈中学校）１点
院庄小学校	天秤１点、電流計１点、社会科教材フィルム１点、ラジオ１点、プラネタリウム１点、旧式顕微鏡３点、温度計ケース１点、光源装置１点、銀秤５点、マクデブルクの半球１点
個人	足踏みミシン１点
個人	羽子板１点
個人	ヒューガルポンプ１点

B. 文化財センター日誌抄（平成 24 年度）

４月５日　障害者に史跡津山城跡を開放するための登城路警備
４月12日　クリーンセンター建設に伴う発掘調査開始（～11月15日）
４月22日　美作教育会館で「津山城の整備について」講演（豊島）
４月29日　岩屋城を守る会総会に出席（竹内）
５月16日　東消防署建設に伴う確認調査開始（～６月５日）
５月19日　第1回美作考古学談話会の開催（仁木）
６月２日　美作大学で美作学講座「美作国分寺跡」について講演（小郷）
６月５日　奈良文化財研究所林良彦建造物研究室長苅田家住宅（市指定史跡）を調査
６月６日　中道中学校チャレンジワーク（～８日）
６月10日　美作の中世山城連絡協議会総会に出席（竹内）、同総会で「美作国の建国前史」について講演（小郷）
６月13日　東中学校チャレンジワーク（～15日）
６月28日　大人の学校で講演（仁木）
７月７日　黒岩遺跡発掘調査現地説明会
７月11日　文化庁金井健調査官（建造物担当）本源寺を調査
７月19日　全国史跡整備市町村協議会中国地区協議会出席のため出雲市に出張（～20日、仁木）
８月８日　津山やよいライオンズクラブによる沼弥生住居址群草刈
８月９日　岡山県史跡整備市町村協議会総会出席のため笠岡市に出張（竹内・小郷・仲井）
８月17日　勝北公民館で「美作国建国1300年」について講演（小郷）
８月20日　第32回史跡津山城整備委員会開催
８月21日　第1回津山市文化財保護委員会開催
８月25日　第２回美作考古学談話会の開催（豊島）
９月１日　津山市家庭教育推進協議会に衆楽園を案内（豊島）
９月29日　第３回美作考古学談話会の開催（豊島）
10月４日　全国公立埋蔵文化財センター連絡協議会中国・四国・九州ブロック会議のため倉敷市に出張（仁木）
10月７日　みよし風土記の丘友の会文化財探訪会で津山城跡を案内（豊島）
10月13日　考古学研究会岡山10月例会にて黒岩遺跡の発掘調査を報告（豊島）
10月18日　岡山理科大学富岡直人教授城山遺跡を視察
10月23日　清泉公民館で「美作国の建国前史」について講演（小郷）
10月22・25日　河本清・可児道宏津山市文化財保護委員城山遺跡を視察
10月31日　岡山県埋蔵文化財担当者研修会のため岡山市に出張（平井・仲井）
11月4日　院庄地区文化祭で「院庄館跡」について講演（仁木）
11月７日　北陵中学校チャレンジワーク（～９日）
11月13日　鶴山中学校チャレンジワーク（～15日）
11月24日　中世山城シンポジウム「美作国の戦国時代を知る、見る、考える」にパネラーとして参加（小郷）
11月30日　岡山県文化財保護審議会委員泰安寺を視察（小郷・豊島）
12月３日　文化庁参事官西岡聡技官（建造物担当）本源寺を調査（～４日）
12月８日　考古学研究会岡山例会シンポジウム「古墳時代前期の吉備」で報告（小郷）
12月20日　文化庁本中眞主任文化財調査官史跡津山城跡ほかを視察
12月22日　第４回美作考古学談話会の開催（平井）
１月12日　第５回美作考古学談話会の開催（小郷）
１月24日　徳守神社他で文化財防火査察（～25日、仁木・仲井）
１月24日　第10回全国城跡等石垣整備調査研究会のため姫路市に出張（～26日、豊島）
１月27日　田熊の舞台で文化財防火訓練（竹内・小郷・仲井）
２月５日　岡山県史跡整備市町村協議会研修会参加のため備前市に出張（小郷・平井）
３月１日　津山福祉住宅研究会で「美作国建国1300年の歴史と記念行事について」を講演（小郷）
３月３日　第31回津山市文化財調査報告会開催(104名

)、高田歴史文化フォーラムで「高田地域の遺跡と文化財」について講演（仁木）

３月17日　史跡美作国分寺跡公有化事業地元説明会

３月22日　県指定重要文化財指定書交付式のため岡山市に出張（小郷）

３月25日　第33回史跡津山城整備委員会開催

３月26日　第２回津山市文化財保護委員会開催

３月30日　第６回美作考古学談話会の開催（仲井）

C. 埋蔵文化財発掘調査

1．平成 24 年度届出関係一覧

埋蔵文化財発掘の届出（法第 93 条）

遺跡名	所在地	工事種別	期間	面積（㎡）	津山市発番津教委文	発信日	指示事項	実施日	備考
山形福田遺跡	新野山形 69-2	個人住宅	4 月中～ 7 月	305.3	第 53 号	4.4	慎重	—	
美作国府跡	山北 77-4	個人住宅	4 月末～ 6.1	173.25	第 75 号	4.3	立会	6.25	遺構・遺物無し
美作国府跡	総社 83-1	宅地造成	5.1 ～ 9.1	460.22	第 202 号	4.6	立会	5.30、6.1	遺構・遺物無し
津山城跡	山下 46-3	個人住宅	4.11 ～ 4.30	279.8	第 209 号	4.10	立会	4.16、4.17	遺構・遺物無し
池ヶ原大門遺跡	池ヶ原 642-1	事務所	4 月中～ 7.20	602.13	第 197 号	4.9	立会	4.18	遺構・遺物無し
金井逧田西遺跡	金井 236	個人住宅	6.13 ～ 11.13	600.22	第 296 号	4.13	立会	5.16	遺構・遺物無し
野田城跡	下野田 123-1	個人住宅	6.1 ～ 10.1	99.91	第 420 号	4.27	立会	5.31	遺構・遺物無し
池ヶ原市場遺跡	池ヶ原 96-1	店舗建設	7.1 ～ 8.3	841.27	第 515 号	5.2	慎重	—	
高野本郷西高下遺跡	高野山西 64-3	墓地	7.1 ～ 7.30	16	第 676 号	5.15	立会	8.7	遺構・遺物無し
山北遺跡	小田中 117-11	個人住宅	8.1 ～ 12.17	265.8	第 1321 号	7.4	立会	8.1	遺構・遺物無し
八幡神社遺跡	宮尾 355-1	個人住宅	8.10 ～ 10.1	53.6	第 1457 号	7.13	立会	10.1	遺構・遺物無し
隠地東遺跡	桑下 712-1	個人住宅	9.15 ～ 2.15	496	第 1563 号	7.25	立会	9.24	遺構・遺物無し
津山城跡	山下 90	個人住宅	未定	141	第 1782 号	8.14	立会	9.11	遺構・遺物無し
美作国府跡	山北 19-1	駐車場	9.15 ～ 10.15	57.9	第 1757 号	8.10	立会	10.25	遺構・遺物有り
原口遺跡Ａ	加茂町黒木 368 外	通信設備	7.28 ～ 10.31	284.11	第 1783 号	8.10	慎重	8.2、8.6	
押入西遺跡	押入 910-15	個人住宅	9.18 ～ 3.28	321.89	第 1967 号	9.4	立会	9.13	遺構・遺物無し
福井横尾遺跡	福井 9-5	個人住宅	10 月～	499	第 2079 号	9.10	立会	11.21	遺構・遺物無し
美作国府跡	山北 23-7	個人住宅	11.20 ～ 3.20	179.28	第 2172 号	9.19	立会	10.16	遺構・遺物無し
山方観音堂遺跡	山方 459-1	個人住宅	11.20 ～ 3.20	379	第 2261 号	9.26	立会	12.20	確認調査実施
美作国府跡	総社 47-4	駐車場	11.1 ～ 11.30	396	第 2536 号	10.19	慎重	—	（なし）
竹ノ下遺跡	沼 81-2	建物建築	8.20 ～ 12.25	552	第 2573 号	10.23			顛末書
美作国府跡	山北 359-20	個人住宅	12.15 ～ 3.31	162	第 2976 号	10.28	立会	12.11	遺構・遺物無し
中原三ツ木遺跡	池ヶ原 54-6 外	墓地造成	2.20 ～ 3.20	89.85	第 3268 号	12.27	立会	事後確認	遺構・遺物無し
大田土居之内遺跡	大田 848-1	宅地造成	3.5 ～ 3.20	1,377	第 3418 号	1.15	慎重		（なし）
津山城跡	山下 43-1	個人住宅	未定	140.66	第 3487 号	1.18	立会		
山方観音寺遺跡	山方 206-1	個人住宅	2.10 ～	400.48	第 3517 号	1.22	立会	5.15	遺構・遺物無し
美作国府跡	山北 77-6	個人住宅	2.20 ～ 6.20	169.9	第 3685 号	2.4	立会	3.8	遺構・遺物無し
美作国府跡	総社 1-1	個人住宅	2.15 ～ 6.30	180.9	第 3687 号	2.4	立会	2.19	遺構・遺物無し
正善庵遺跡	東一宮 57-34	個人住宅	3.10 ～ 8.20	281	第 3809 号	2.19	立会		範囲外のため申請取り下げ
衆楽園	山北 629-8	個人住宅	4.18 ～ 5.20	97.39	第 3855 号	2.19	立会	3.25	遺構・遺物無し
美作国府跡	山北 385-10	個人住宅	4.22 ～ 7.30	203.44	第 4249 号	3.18	立会	5.16	遺構・遺物無し
中原遺跡	中原 59-6	個人住宅	4.15 ～	241.15	第 4355 号	3.26	立会	7.31	遺構・遺物無し

埋蔵文化財発掘の届出（法第 94 条）

遺跡名	所在地	工事種別	期間	届出者	津山市発番	発信日	指示事項	実施日	備考
狐塚遺跡	押入 1109-3 外	校舎建設	3.1 ～ 6.30	津山市山北 520 津山市長宮地昭範	第 3693 号	2.5	立会	4.8	遺構・遺物無し
久米廃寺	宮尾 528-1	道路	1.21 ～ 3.18	津山市山北 520 津山市長宮地昭範	第 3836 号	2.18			顛末書

埋蔵文化財発掘調査の報告（法第 99 条）

遺跡名	所在地	遺跡種別	調査期間	面積（㎡）・原因	津山市発盤	発信日	調査担当	備考
衆楽園	山北 546-51	庭園	2.20 ～ 3.15	36・遺跡整備	第 3970 号	2.20	平井・仲井	本書参照

埋蔵文化財試掘・確認調査の報告（法第 99 条）

遺跡名	周知・未周知	所在地	調査期間	面積（㎡）・原因・包蔵地の有無	津山市発番	発信日	調査担当	備考
中原遺跡	周知	中原 71-1 外 1	5.16 ～ 6.5	102・消防署庁舎・無	第 1082 号	6.15	仁木	本書
原口遺跡Ａ	周知	加茂町原口 368	8.2 ～ 8.6	40・無線基地局・無	第 1783 号	8.10	仁木・仲井	
大田土居之内遺跡	周知	大田 848-1	1.10	9・宅地造成・無	第 3412 号	1.15	平井・仲井	本書

２．現地説明会

黒岩遺跡

平成 24 年 7 月 7 日（土）

黒岩遺跡

第Ⅱ部
調　査　の　概　要

A．市内遺跡試掘･確認調査報告（平成 24 年度）

津山市が平成 24 年度に国庫補助事業（市内遺跡発掘調査等）でおこなった事業についての概要報告である。調査は、開発に伴う確認調査（西吉田地区、美作国府跡、北小学校）、保存に伴う確認調査（衆楽園、院庄構城跡）、龍王塚古墳測量調査の７件である。

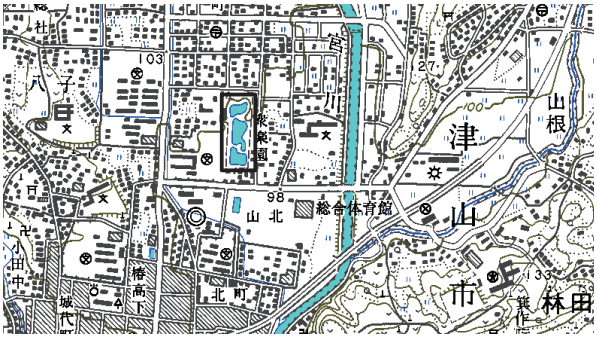
1．旧津山藩別邸庭園（衆楽園）確認調査

a. 調　査　地　　津山市山北 546-51 番地
b. 調 査 期 間　　平成 25 年２月 20 日～
　　平成 25 年３月６日
c. 調 査 面 積　　約 34.5㎡
d. 調査の概要

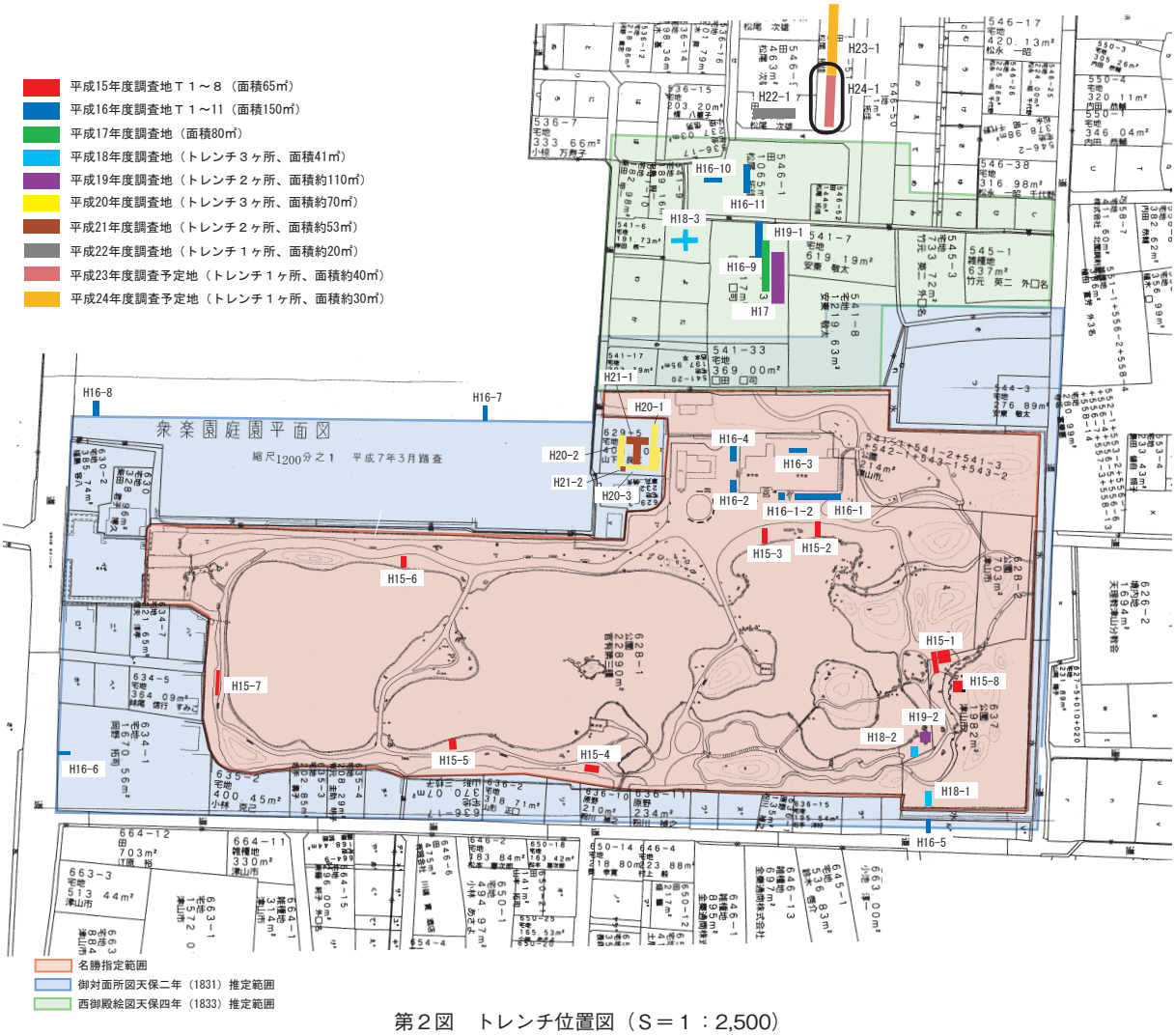
旧津山藩別邸庭園（衆楽園）は平成 14 年に国指定の名勝に指定され、平成 15 年度から継続的に確認調査を実施しており、今年度は、昨年度調査地の東側に隣接する部分にトレンチ２本を設定して調査を行った。調査期間及び面積等は上記のとおりである。

トレンチ１

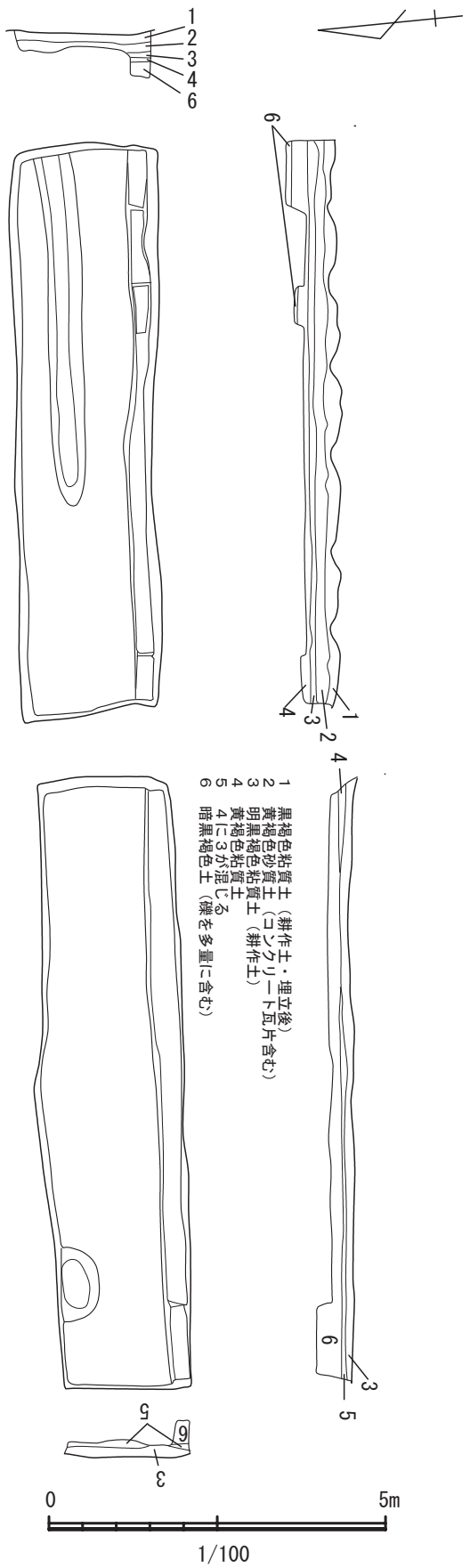
東西方向に長さ 17.5 m×幅２ mのトレンチである。耕作土を取り除くと黄色褐色の粘土層が現れ（一部耕



第１図　遺跡位置図（S＝１：25,000）



第２図　トレンチ位置図（S＝１：2,500）



第３図　確認調査トレンチ平・断面図

作土が混じる）その下からは、多くの礫を含む黒色の層が現れた。この層より下には遺構面はないと判断したが、確認のためトレンチ西端部分をさらに掘り下げるも同じ層が続いており、遺構面は検出できなかった。トレンチ１では遺構、遺物ともに確認できなかった。

トレンチ２

東西方向に長さ 17 m×幅２mのトレンチである。耕作土を取り除くと黄褐色の砂質土層が現れこの層に昭和の頃のものと思われるコンクリート瓦が混じっていたことから、比較的最近の埋土の層と考えられる。その下からは、ほぼ耕作土と同じ質の層が現れ、その下からは黄色褐色の粘土層が現れた。その下は多くの礫を含む黒色の層が現れ、これはトレンチ１でこの層より下には遺構面はないと判断した層と同じものである。土層観察からこのトレンチ周辺では、ごく最近、耕作土上に土を盛り新たに畑として利用したことが分かったが、遺構、遺物ともに確認できなかった。

まとめ

今回の調査範囲では、旧津山藩別邸庭園（衆楽園）に関連する遺構及び遺物は確認されなかった。

（平井泰明）

着手前

着手前（トレンチ設定）

西側トレンチ

東側トレンチ

作業終了

作業風景

２．中原遺跡（東消防署予定地）確認調査

a. 調　査　地　　津山市中原 71-4 番地　外

b. 調 査 期 間　　平成 25 年５月 16 日～
平成 25 年６月５日

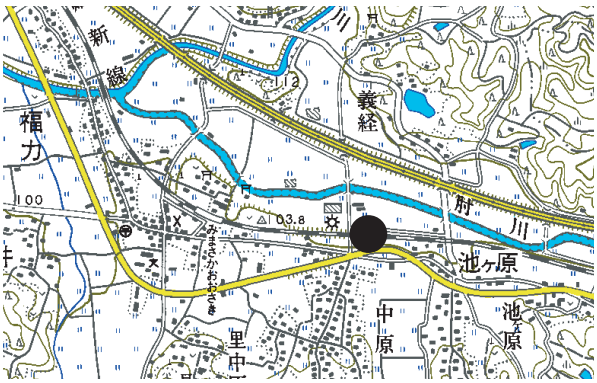
c. 調 査 面 積　　約 102.8㎡

d. 調査の概要

中原地区は、津山市南東部に位置する田園地帯である。当該地区内に津山圏域消防組合東消防署の建設予定地が選定され､周知の埋蔵文化財包蔵地（中原遺跡）の範囲に該当するため、工事着手前に確認調査を実施して遺構の有無及び範囲を確認のうえ、その結果によって以後適宜の対応をとることになった。以上の経過から、庁舎施設の建設予定地を対象として確認調査を実施した。

確認調査は、建設予定範囲にトレンチ２本を設定し、上記のとおり遺構の有無及び内容・範囲の確認を目的として実施した。調査位置は、南から延びる丘陵性山地の突端にあたり、調査位置付近は頂部から北東方向にやや下った位置にあたる。地形的には西・南方向に向かってはほぼフラットもしくは緩く傾斜するが、東及び北方向については谷地形が入り込み、最低位部である北方の広戸川支流の肘川に向かって落ち込む地形を呈する。

調査にあたっては、庁舎建設予定位置において２か所のトレンチ（Ｔ－１・Ｔ－２）を掘り下げ、作業員による精査を行って遺構の有無を確認した。調査地については、現況は更地であったが、以前に土地造成と建築行為が行われていた。このことからトレンチ掘削に伴って相当量の排土量が予測されたことから、調査実施にあたっては造成土の排土を主目的として重機を使用し、のち人力によってトレンチの精査を行ってい



第１図　遺跡位置図（Ｓ＝１：25,000）

る。トレンチの規模は２ｍ×24ｍ（Ｔ－１）、２ｍ×22.3ｍ（Ｔ－２）である。調査完了後は重機により埋め戻しを行った。

調査の結果、造成土下層に暗褐色～黒色粘質土（遺物包含層）が認められ、現地表からそれぞれ約1.2m（高位）～2.3m（低位）（Ｔ－１）、約0.85m（高位）～1.9m（低位）（Ｔ－２）で黄褐色土（基盤層）が検出された。加えて、Ｔ－２においては旧建物の基礎により攪乱を受けている状況が確認された。そのほか、土地造成以前の状況とみられる水田耕土の残欠や、下層の自然堆積層も部分的に各トレンチで認められた。

調査位置については、旧地形がＴ－２付近を最高位とし、Ｔ－１及び各トレンチの北方向に向かって傾斜していく状況が確認されたが、それぞれのトレンチにおいて遺構は確認されなかった。

また、出土遺物は、主として暗褐色～黒色粘質土から弥生土器・須恵器片が少量出土した。

今回の調査位置においては、遺跡範囲のほぼ中央であり、事前の地形等の検討から遺構の所在が想定されたが、遺構は確認されなかった。調査結果から敷衍して判断すれば、旧地形は丘陵頂部から北に向かってやや急激に傾斜するため地形的に遺構が所在しない可能性と、水田造成等の土地利用により削平されている可能性が指摘される。

（仁木康治）

トレンチ14（北から）

トレンチ14断面（北から）

トレンチ15（北から）

トレンチ15断面（北から）

第２図　トレンチ詳細図（S＝1：100）

３．下横野三宅池頭遺跡確認調査

a. 調　査　地　津山市上横野 79-1 番地
b. 調 査 期 間　平成 24 年６月 22 日
c. 調 査 面 積　約 71.5㎡
d. 調査の概要

上横野地区は、津山市北部に位置する田園地帯である。当該地域にある高田神社の駐車場工事施工中に竪穴住居址とみられるものが発見された。

この位置は、周知の遺跡に該当していない位置であったことから、津山市教育委員会は工事主体者である高田神社の役員と協議し、新規発見遺跡（遺跡範囲の拡大）として文化財保護法第９６条に規定する届出を行ったうえで確認調査を実施した。確認調査は、遺構の現状記録を目的とした。

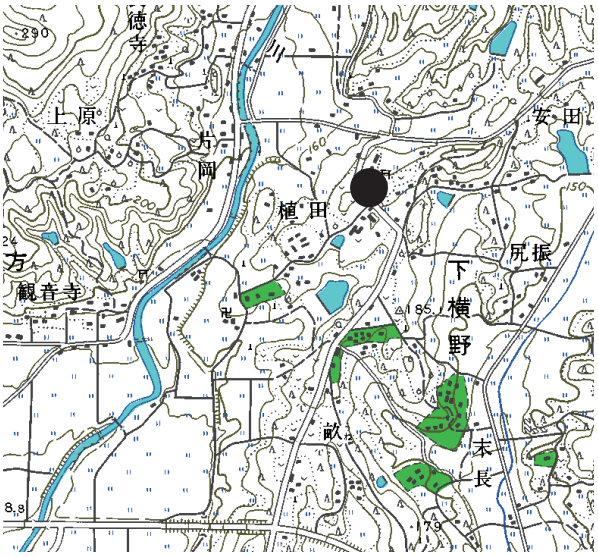
調査位置は、津山市上横野・大篠地域と加茂地域を隔てる山地から樹枝状に延びた丘陵性山地の頂部である。地形的には大まかに南西方向に向かって緩く傾斜し、最低位部を流れる横野川に向かって下降する。

調査にあたっては、駐車場法面に確認された竪穴住居跡の現状記録を行うため、作業員による精査を行って遺構の断面検出と遺物の有無を確認した。

調査の結果、径７ｍ程度とみられる竪穴住居址１棟が検出された以外の遺構は認められなかった。また、住居址の所属時期は、出土した遺物から弥生時代後期に属するものと判断した。

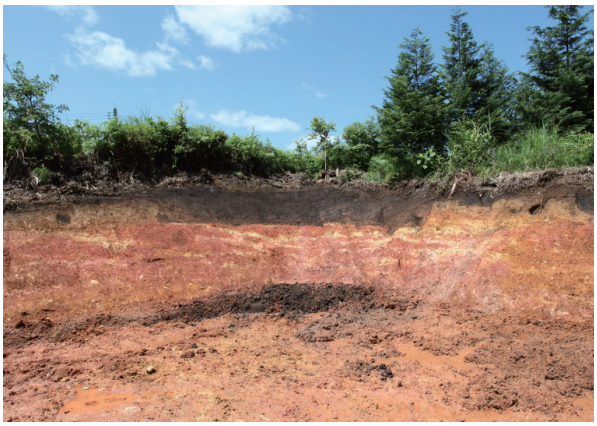
今回の調査は、遺跡の不時発見というケースであった。発見位置が丘陵性山地のほぼ頂部であるため、周辺地形等を考えると、遺跡地図上で想定されている遺跡範囲がより拡大する可能性があるとみられる。
また、当該地域は遺跡がやや希薄な地域であり、この地域に関する考古資料の増加をみたことは成果としてあげることができるとみられる。

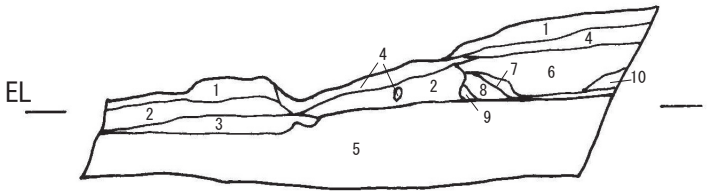
（仁木康治）

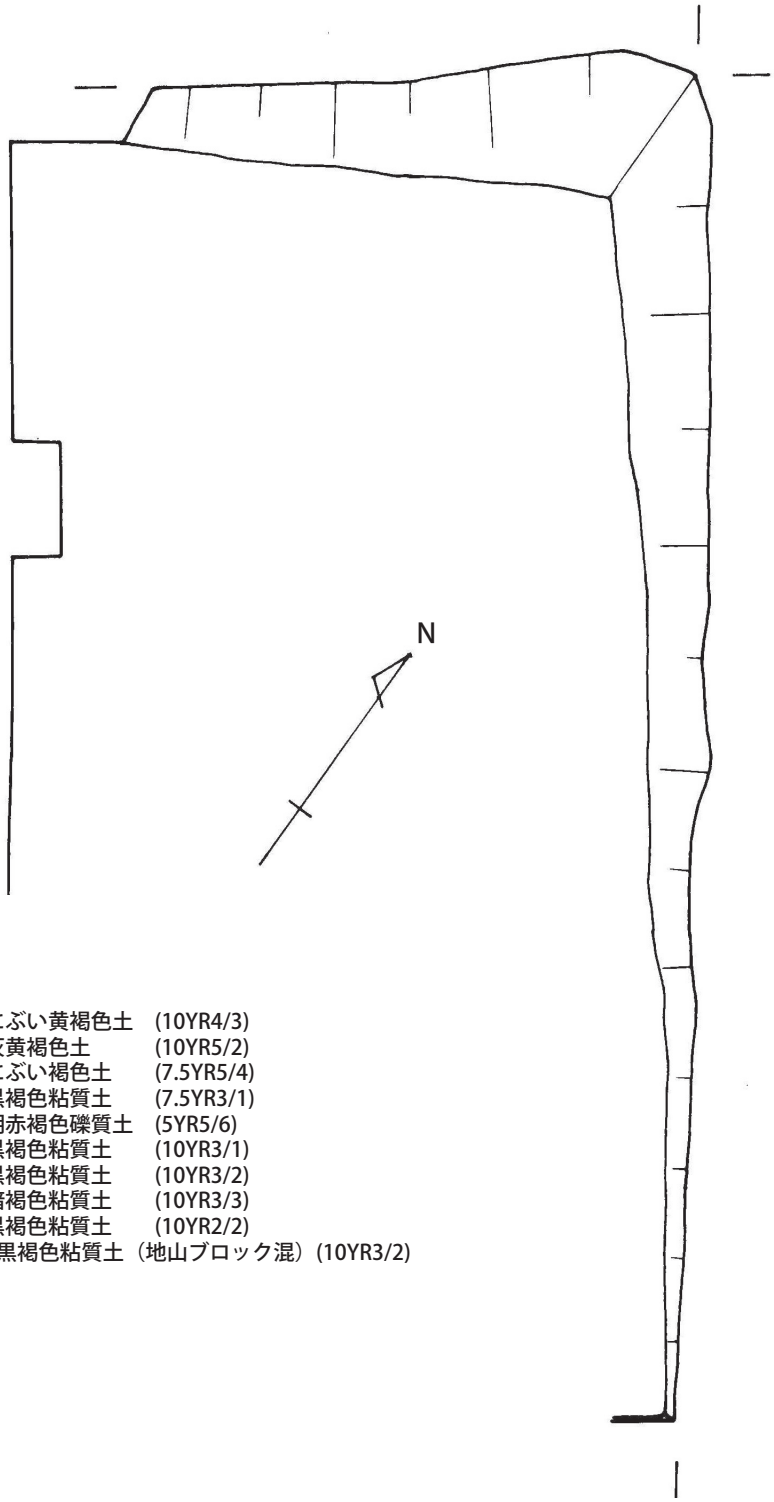


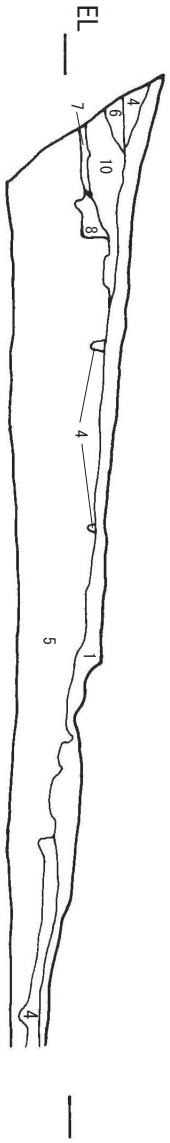
第１図　調査位置図（Ｓ＝１：25,000）

作業状況（南西から）


調査完了後（南から）







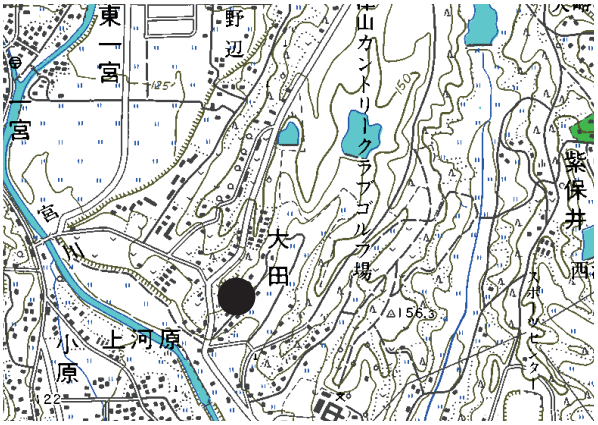
1.にぶい黄褐色土　(10YR4/3)
2.灰黄褐色土　(10YR5/2)
3.にぶい褐色土　(7.5YR5/4)
4.黒褐色粘質土　(7.5YR3/1)
5.明赤褐色礫質土　(5YR5/6)
6.黒褐色粘質土　(10YR3/1)
7.黒褐色粘質土　(10YR3/2)
8.暗褐色粘質土　(10YR3/3)
9.黒褐色粘質土　(10YR2/2)
10.黒褐色粘質土（地山ブロック混）(10YR3/2)

下横野三宅池頭遺跡確認調査　平・断面図（S=1:200）

4．大田土居之内遺跡確認調査

a. 調　査　地　　津山市大田 848-1
b. 調 査 期 間　　平成 25 年 1 月 10 日
c. 調 査 面 積　　約 9㎡
d. 調査の概要

住宅地の造成予定地内の、掘削を行う範囲の確認調査である。



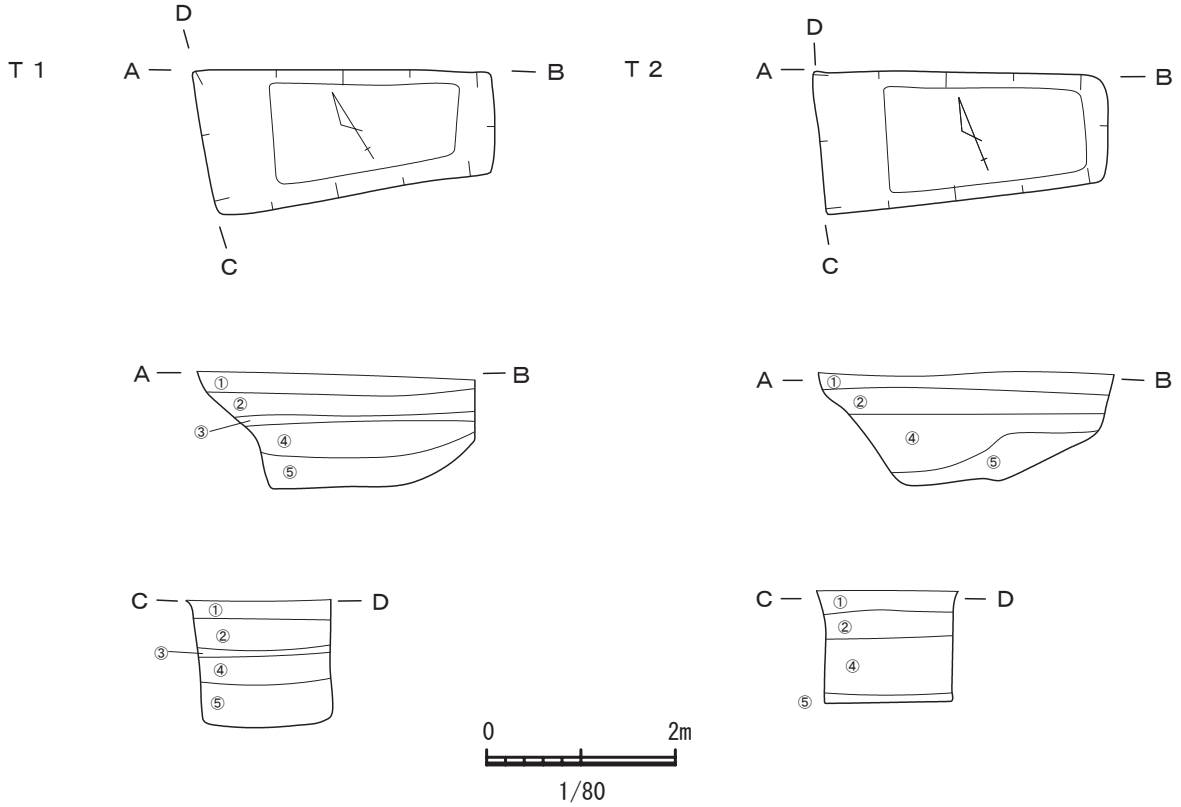
調査地は、丘陵の西斜面を削平して平坦面をつくり畑として利用していた場所である。このため、旧地表面はすでに失われていることが予想された。

調査は、まず 1.5 m × 3 mのトレンチを２本重機にて掘り下げ遺構の有無等の確認等を行った。その結果、耕作土の下に真砂土（土地所有者によると畑をつくるときに埋めたもの）さらにその下には、黒ボク土を含む層その下に黒ボク土層そして、地山が現れた。遺構、遺物ともに検出されなかった

調査の結果、今回の調査範囲は以前の造成時に旧地表面の削平を受けていること、さらに、一度造成した場所に盛土をして造成をしていることも確認できた。ただ、遺構、包含層ともに確認はできなかった。

上記のことから、今回の調査範囲には遺構は存在しないものと考えられる。

（平井泰明）



① 黒茶褐色土（耕作土）
② 明茶褐色砂質土（真砂土）
③ 明灰色粘質土
④ 黒茶褐色土（やや粘質⑤を含む）
⑤ 黒色土（やや粘質）

大田土居之内遺跡トレンチ平面・断面図（S=1:80）

調査前（北から）

T-1

T-2

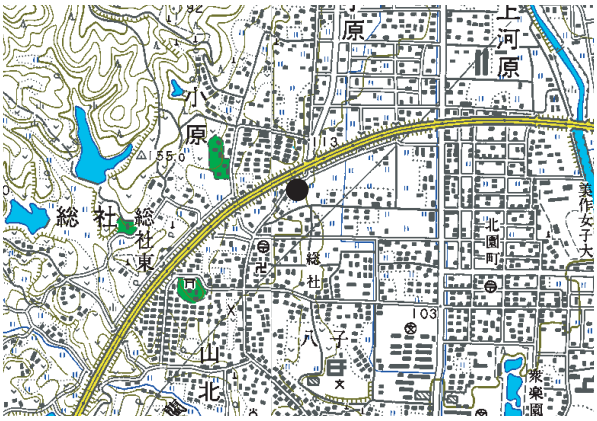
作業風景

5．美作国府跡確認調査

a. 調　査　地　　津山市総社 77-1 番地

b. 調 査 期 間　　平成 25 年 3 月 21 日～
平成 25 年 3 月 30 日

c. 調 査 面 積　　約 15㎡



第１図　遺跡位置図（Ｓ＝１：25,000）

d. 調査の概要

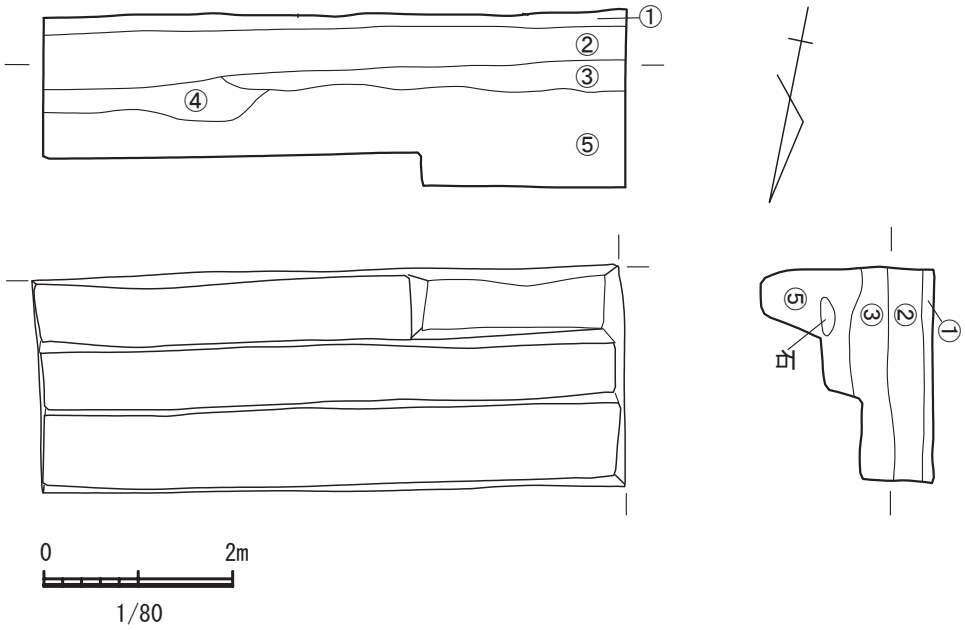
店舗の建設及びそれに伴う造成予定地内の、掘削を行う範囲の確認調査を実施した。

トレンチは、東西方向に長さ 6.2 m × 幅 2.4 m の範囲を設定し掘削を行った。

まず、耕作土を取り除くと黄褐色の粘土層が現れ、その下からは、多くの礫を含む黒色の層が現れた。この層からは、勝間田焼、須恵器及び土師器片が出土した。ただ、遺構に伴う出土ではなく、遺物包含層と考えられる。また、極小破片のみの出土のため、図示できるものはなかった。さらに下層で黄褐色の砂礫層（20 ～ 30cmの石を含む）を検出した。この時点で、この層より下には遺構面はないと判断したが、確認のためトレンチ西端部分をさらに掘り下げるも（表土から約 1.8 m まで）この砂礫層がさらに続き、遺構面は検出できなかった。

今回の調査では遺構は確認できず、出土遺物についても包含層に伴うものとみられることおよび当地が谷地形であることを考えると、今回の調査地には遺構は存在しないと判断される。

（平井泰明）



① 黒灰色土（耕作土）
② 黄褐色粘質土（同程度の灰色粘質土を含む）
③ 暗黒褐色粘質土（礫を含む）　遺物包含層
④ 茶褐色粘質土（礫を含む）
⑤ 黄褐色砂礫層（20～30cmの石を含む・灰色砂礫層が混じる。・粘度高い）

美作国府跡トレンチ平面・断面図（S=1:80）

調査前

完掘

作業風景

6. 地蔵二つ塚古墳測量調査

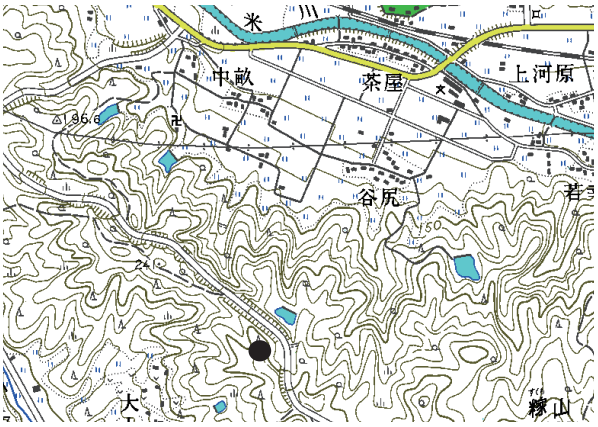
a. 測　量　地　　津山市山北 238 番地
b. 測 量 期 間　　平成 23 年 8 月 17 日
c. 測 量 面 積　　約 1,800㎡
d. 測量の概要

市町村合併に伴い、新たに津山市指定史跡となった古墳（群）は 19 件あるが、ほとんどは墳丘測量図が未作成であるなど、基礎資料が不足している状況である。

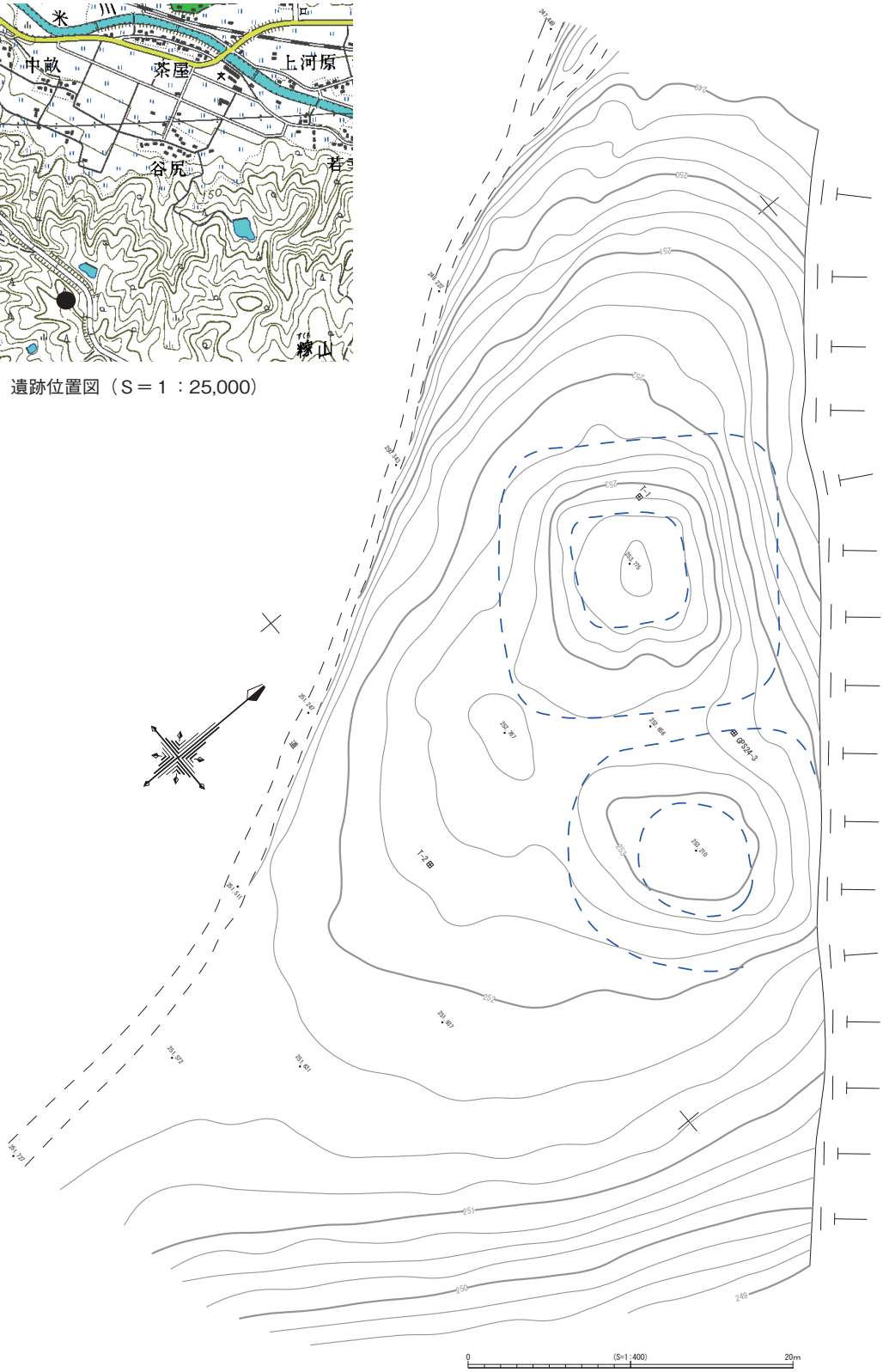
このため、これらの古墳（群）の基礎資料の作成の

一環として、墳丘測量図の作成を目的とした測量調査を平成22年度～平成29年度の計画により実施している。

その３年次目にあたる本年度においては、地蔵二つ塚古墳（本稿）及び大日古墳の測量調査を実施した。本市においては、旧町村から引き継いだ指定文化財のうち、旧町村の指定名称で既に一般に周知されているものは旧指定名称をそのまま使用している。地蔵二つ



第１図　遺跡位置図（Ｓ＝１：25,000）



地蔵二つ塚古墳平面図（Ｓ＝１：400）

地蔵二ツ塚古墳全景（南から）

塚古墳については、文化財保護法上の公式名称（遺跡地図記載の名称）は「二ツ塚１号墳・二ツ塚２号墳」であり、指定文化財としての名称は、「地蔵二つ塚古墳」を使用しているが、同一の古墳である。

地蔵二つ塚古墳は、従来の見解では１号墳は径 16 m、高さ約１mの円墳、２号墳は径７m、高さ約 0.8 mの方墳とされていた。測量調査は、市有地であるため管理担当課の承諾を得たうえで、平成 25 年２月～３月にかけて測量業者に委託して実施した。

現地作業は、事前に作業の障害となる立木の伐採を行い、市教育委員会職員の現地での立会及び指示のもと行った。

調査の結果については別添図のとおりである。今回の測量の成果を踏まえた所見としては、地蔵二つ塚古墳については、２基とも墳丘盛土の流出が著しいが、１号墳は一辺約 16 m、高さ約 1.2 mの方墳、２号墳は一辺約 14 m、高さ約１mの方墳とみられることが指摘された。今回の調査により、古墳に関する基礎資料の把握ができたことが成果としてあげられる。なお、調査中に遺物等は確認されなかった。

（仁木康治）

７．大日古墳測量調査

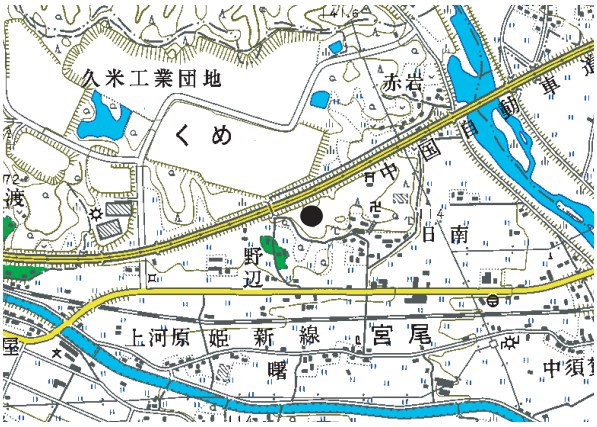
a. 測　量　地　　津山市宮尾 913 番地　外

b. 測 量 期 間　　平成 25 年２月７日～
平成 25 年３月６日

c. 測 量 面 積　　約 1,500㎡

d. 測量の概要

大日古墳は、津山市宮尾地内に所在する。古墳の名称については、大日古墳は文化財保護法上の公式名称（遺跡地図記載の名称）は「大日１号墳」であるが、指定文化財としての名称は、旧自治体の指定名称を引き継ぎ、「大日古墳」を使用している。



第１図　遺跡位置図（S＝１：25,000）

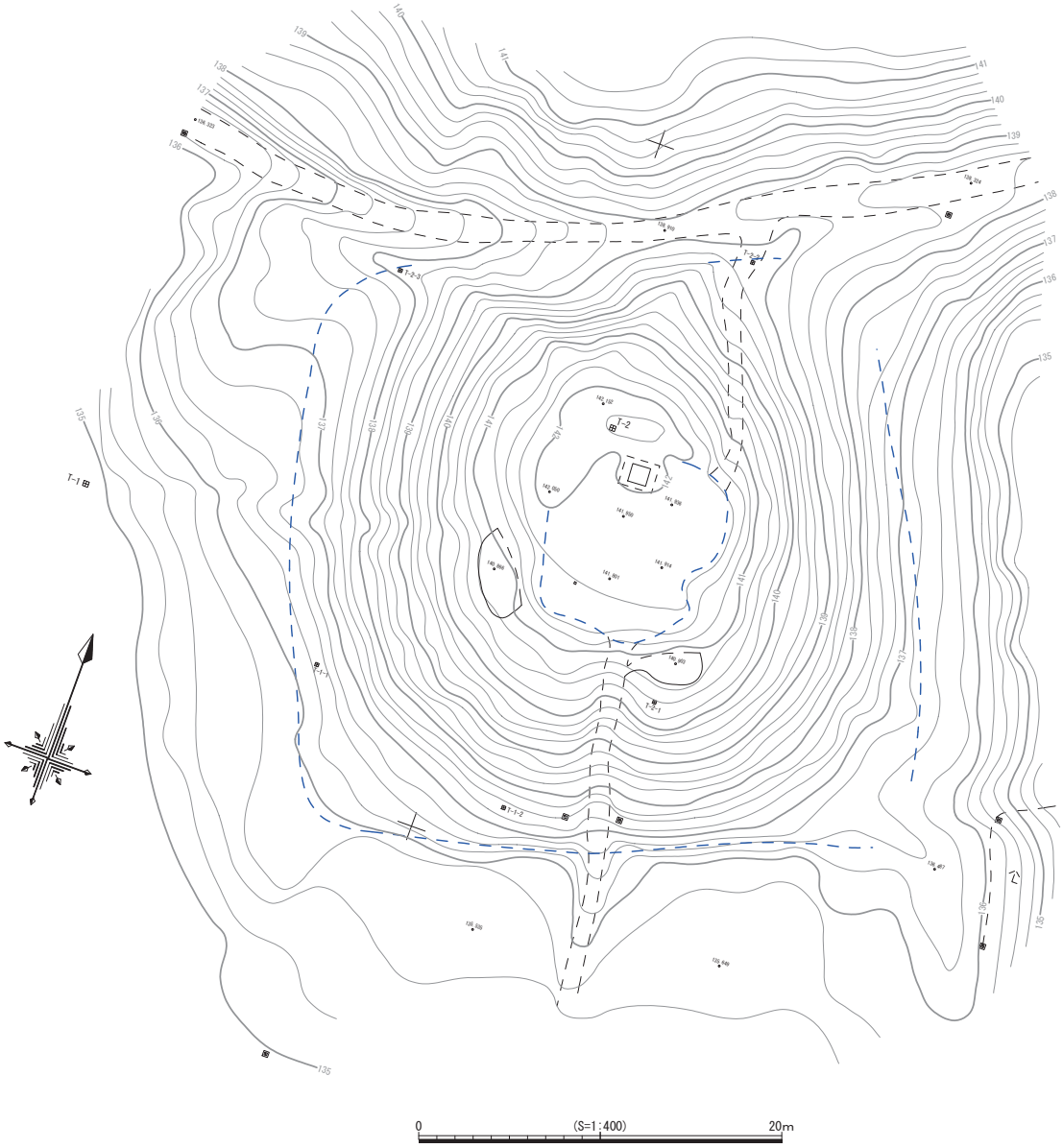
本墳は、美作地域では最大級の方墳として周知されており、遺跡地図の記載によれば、従来の見解では一辺約 28 m、高さ約５mの方墳とされていた。測量調査は、古墳の所在地が民地であるため、地権者にあらかじめ立ち入りの承諾を得たうえで、平成 25 年１月～２月にかけて測量業者に委託し、市教育委員会職員の現地での立会及び指示のもと測量作業を実施した。

測量調査の結果については別添図のとおりである。今回の測量の成果を踏まえた所見としては、大日古墳は、墳丘の変形がやや目立つものの、一辺約 32 m、高さ約５mの方墳であることが指摘される。これは、旧来の数値よりやや規模が大きくなるが、基本的に従来からの見解を補完するものである。

なお、調査中に遺物等は確認されなかった。

（仁木康治）

大日古墳全景（北西から）



大日古墳平面図（S=1:400）

B. クリーンセンター建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報

1．黒岩遺跡

a. 調　査　地　　津山市領家 1141 － 1　他

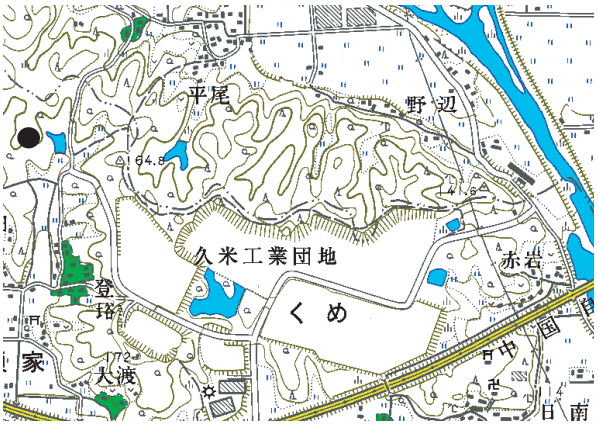
b. 調 査 期 間　　平成 24 年 4 月 12 日～平成 24 年 8 月 3 日

c. 調 査 面 積　　約 4,600㎡

d. 調査の概要

黒岩遺跡は、平成 23 年度から調査を行い、供献に用いたと考えられる土器等が出土したが、主体部の遺構が確認できなかった。そのため、今年度では、更に人力にて掘下げを行い主体部の検出を行った。調査結果は以下のとおりである。

なお、平成２４年７月７日には、現地説明会を開催し、調査結果の公開を行った。



第１図　遺跡位置図（Ｓ＝１：25,000）

１．弥生時代の遺構

弥生時代の遺構は、土壙墓及び木棺墓をあわせて７４基検出した。その土壙の多くは両端部に小口溝がみられ、検出された土壙墓のうち、５２基にこの小口溝がみられたことから、黒岩遺跡では、小口板を埋めて固定するタイプの木棺墓が多くをしめることがわかった。

まず、溝と列石によって区画された３基の台状墓を中心とした墳墓群を確認した。そのうち、丘陵頂部に位置する台状墓は、12.5 m × 11 mの規模で、墓域内には３０基の土壙墓を検出した。また、墓を区画する溝が確認され、特に北東、南東側で列石や溝が外側に向かって弧を描いて並んでいることから四隅突出型墳丘墓である可能性も想定している。

次に、小口溝をもたない土壙墓は、南斜面の２基の台状墓内にみられた。この台状墓は、周囲に溝を掘り、Ｌ字状に河原石を立てて墓を区画したもので、これら２基の台状墓のうち、東側の墓内の土壙墓３基にはすべてに枕石が置かれていたが、西側の墓内の土壙墓には、枕石は存在しなかった。

調査区東斜面には、墓壙上に石を配した土壙墓の一群を検出した。遺物が出土していないため正確な時期は不明だが、墓の形態から、弥生時代のものと推測される。

黒岩遺跡遺構配置図

黒岩遺跡全景

これらのことから、弥生時代の墓は、①小口溝をもつもの②小口溝をもたないもの③墓壙上面に石を配したものの大きく３つのタイプが存在することが分かった。周辺地域のこれまでの調査などから推測すると、まず、丘陵頂部に木棺墓が造られはじめ、その後徐々に墓の領域を斜面下に拡張していったと考えられる。つまり、墓が造られた順番としては①→②→③が想定される。

これらの墓の時期については、掘削中に出土した土器（壺、甕、器台など）から、弥生時代後期後葉と考えられる。また、遺物については、墓壙内から出土したものはほとんどないことから、副葬したものではなく、墓の上に供献されたものと考えられる。

２．古墳時代の遺構

土器棺、箱式石棺などを検出した。土器棺は、土師器甕、須恵器甕の口を合わせて１つの棺としている。箱式石棺は、河原石と板状の石を並べてつくられていた。棺内東側小口近くには、須恵器の杯蓋と高杯の脚部を欠いた身の部分が置かれており、これは、枕として使用されたものと考えられ、埋葬頭位は東であったと推測される。

土器棺と箱式石棺のつくられた時期は、出土した須恵器の年代から、古墳時代中期後葉と推測される。

その他に、調査区北東斜面２か所でも杯身・杯蓋のセットが出土していることから、古墳時代の墓がこのほかにも存在したと推測されるが、黒岩遺跡の存する丘陵が大きく削平を受けているため、詳細は不明である。

（豊島雪絵）

２．城山遺跡

a. 調　査　地　　津山市領家 1446

b. 調 査 期 間　　平成 24 年 9 月 24 日～
平成 24 年 11 月 15 日

c. 調 査 面 積　　約 950㎡

d. 調査の概要

城山遺跡は、平成 23 年度に試掘調査を行い、山頂部よりやや北側に下った場所で弥生時代のものと思われる貯蔵穴を検出したため、上記の調査期間中に発掘調査を行った。

発掘調査の結果、弥生時代の貯蔵穴と考えられる遺構４基と落し穴と考えられる遺構１基が検出された。

貯蔵穴のうち２基からは、埋葬されたと考えられる人骨が出土した。

この遺構は、食物などを保存しておくための貯蔵穴として利用されていたものが、その後、墓として使用されたと考えられるもので、現在のところ、人骨は頭部及び大腿部を確認している。また、出土状況からこれらの人骨は、再葬されたものと推定される。

貯蔵穴の年代は、人骨の下層から出土した土器から、弥生時代終末期もしくはそれより若干新しい時期（３世紀後半頃）のものと考えられ、弥生時代の貯蔵穴を利用した埋葬例は、岡山県内では初めての確認とみられる。

（平井泰明）

人骨が出土した貯蔵穴

人骨の出土状況

第Ⅲ部
文化財の保護・管理

A．文化財の保護

1．文化財保護委員会

第１回：８月 21 日

第２回：３月 26 日

2．新指定・登録の文化財

《県指定文化財》

泰安寺本堂及び表門（建造物、３月１日付け）

神伝流古式泳法（無形文化財、３月１日付け）

《市指定文化財》

千年寺第二代鐵堂道融和尚墳墓ほか歴代住持墓所（史跡、６月 26 日付け）

大隅神社の木造獅子狛犬（彫刻、９月 25 日付け）

3．文化財防火訓練

１月 27 日　田熊の舞台

泰安寺本堂

千年寺第二代鐵堂道融和尚墳墓ほか歴代住持墓所

泰安寺表門

大隅神社の木造獅子狛犬

神伝流古式泳法

文化財防火訓練

B．指定文化財の管理

1．国指定文化財

《建造物の修理等》

中山神社・鶴山八幡神社・総社防災設備保守点検

《史跡の公有化、整備》

美作国分寺跡の公有化事業（８年次）

・土地２筆の購入、草刈

・地元説明会の開催：3 月 17 日

津山城跡の保存整備事業

・天守台間詰石補修工事

・「津山城だより No.17」の刊行

・説明板の設置（切手門）

・整備委員会の開催

第 30 回（8 月 20 日）、第 31 回（3 月 25 日）

《史跡の管理、草刈等》

美和山古墳群の管理、草刈・剪定

三成古墳の草刈、院庄館跡の管理・草刈

《天然記念物の管理》

トラフダケ自生地の管理

《有形民俗文化財の防災点検》

田熊の舞台防災設備保守点検

2．県指定文化財

《史跡の草刈等》

日上天王山古墳・日上畝山古墳群草刈、久米廃寺跡草刈、矢筈城草刈、岩屋城草刈

《天然記念物の管理》

尾所の桜の管理

《無形民俗文化財への補助》

新野まつり、八幡神社・物見神社の花祭り、高田神社の獅子舞保存伝承への補助

3．市指定文化財

《史跡の草刈等》

沼遺跡草刈・剪定、井口車塚古墳草刈、中宮 1 号墳石室等修繕･草刈、飯塚古墳草刈、正仙塚古墳草刈、足山 1 号墳草刈、煙硝蔵跡草刈、茶屋の一里塚管理、神楽尾城跡草刈、荒神山城跡草刈、医王山城跡草刈、西登山金屋寺草刈、河辺上之町草刈

《保管施設の整備》

徳守神社神輿保存庫

徳守神社御輿保存庫

4．その他の文化財

津山中核工業団地内古墳（一貫東 1 号墳）公園草刈

C．歴史民俗資料館の管理運営

1．加茂町歴史民俗資料館

利用者数　116 人

社会福祉法人津山市社会福祉協議会（加茂町福祉センター）に管理を委託

2．勝北歴史民俗資料館

利用者数　138 人

消防用設備保守管理委託

清掃・燻蒸・整理作業

3．久米歴史民俗資料館・民具館

利用者数　66 人

消防用設備保守管理委託

4．阿波民具館

利用者数　把握できず

第Ⅳ部
資料紹介・研究ノート

美作加茂町万燈山古墳出土の梔子形空玉について

河本　清

１、はじめに

本文は2013年５月に行った加茂郷土史研究会での講演をもとに改めて文章化したものである。講演の主題は万燈山古墳出土の空玉にしぼり、その出土した古墳の追跡調査をし、その意義を試みようとしたものである。結果は十分とはいえないが、空玉をとおして中国山地の一角に所在する万燈山古墳のもっている情報は大変重要なものであることを確認した。その上、この古墳に対する旧加茂町教育委員会や加茂郷土史研究会などの皆さんの熱い思いが石室崩壊の危機にあった石室内部を現状維持の措置を講じ、保存を計ってきたことも知ったので、その簡単な経緯を含めて記述する。

２、古墳の調査と保存の経緯

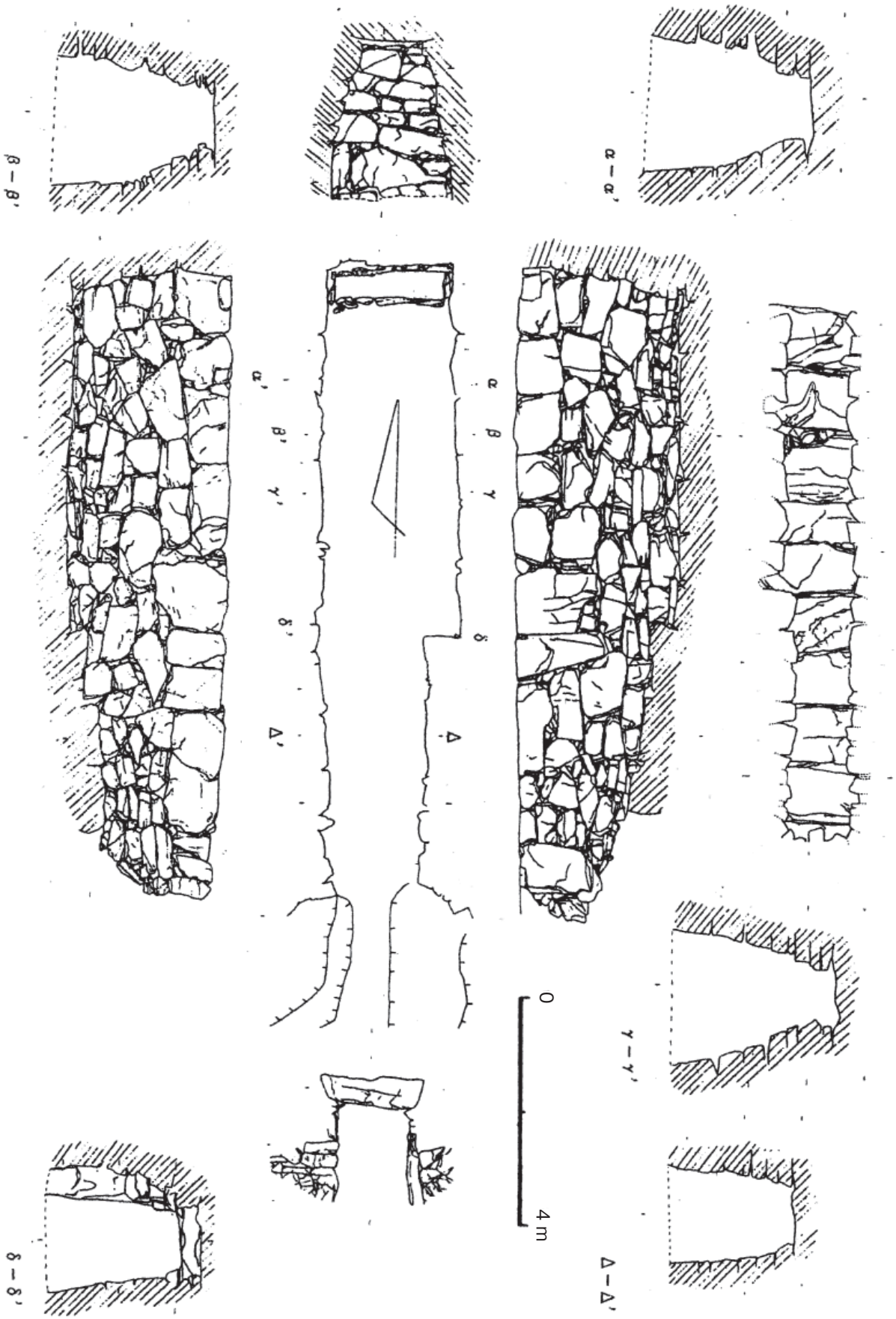
万燈山（まんとうやま）古墳は津山市加茂町大字塔中に所在する径24ｍの円墳で、埋葬施設は左片袖の横穴式石室（奥壁から羨道方向を見た呼称。以下同じ）で石室全長12ｍを測る[注1]。古墳は合併前の苫田郡加茂町教育委員会が町指定史跡を目的に1971（昭和46）年11月20日から1972（昭和47）年１月31日にかけて調査された[注2]。そして1973（昭和48）年３月に『万燈山古墳』が刊行されている[注3]。その後、加茂町教育委員会は町指定史跡として指定し、保存と公開をしてその活用を図ってきたが、石室の側壁に膨らみを生じるなどして、公開に危険性が出てきた。そこで将来的な保存策を講ずるべく調査を奈良大学文学部文化財学科（代表：西山要一）に委託した。調査は1994（平成６）年11月２日～５日及び12月18日～24日の期間に墳丘の測量や石室の実測を行うとともに修復調査や古墳周辺の大気汚染の計測も行っている。その成果は『万燈山古墳測量調査実績報告書』として1995（平成７）年３月に町教育委員会に提出された[注4]。この調査で石室の実測図が初めて作成された。（第１図）その後、期間を少し置くが再度、民間業者による石室保存安定調査を2003（平成15）年４月23日から６月30日まで行い、それらの結果をふまえて2003（平成15）年度中に石室を中心とした保存の措置を講じた。現在では石室内部の見学は可能であり、遺物は加茂町歴史民俗資料館に展示している。

３、梔子形空玉の出土状況について

概報（1973）によると梔子形空玉は玄室内の第２埋葬主体とされる土師質亀甲形陶棺から出土している（第７図）。第１主体は玄室内の奥壁に沿って蓋石のない組合式箱式石棺が設けられている。陶棺は組合式箱式石棺に直交し、玄室東壁よりに長軸を側壁方向に向けて安置されていた。陶棺は美作地方の後期古墳から出土する通有の陶棺で、蓋・身それぞれが二分割されて焼成されたものであるが、蓋の一方の入口よりは欠損していた。調査時の玄室と羨道は、二次堆積土によって、これら陶棺を埋めて、かろうじて人が這って出入りできる状態であつたようだ。これらの堆積埋土を掘りすすめて行くと、陶棺の蓋が反転して、身の横に置かれていたようである。何時の時点かの盗掘によって陶棺内は撹乱されていたが、それでも、棺内からは人骨の小片とともに「小刀１、勾玉５、管玉５、小玉類120、金環６、小金環２、空玉銀製15～16」が「奥半分より出土」した。そして、棺内の遺体は、「３組の金環」から「３体の合装」を推察している。即ち、「奥に頭を置く２遺体・・羨道よりに頭を置く１遺体」である[注5]。梔子形空玉は陶棺の奥半分すなわち奥壁よりからの出土とされているが、２遺体のうちのどちらかは特定できない。

４、梔子形空玉を出土した陶棺

埋葬主体２とされる陶棺は、脚は中空円筒形で３列６行、計18脚である（第２図）。身部は、表面は突帯のみで飾る。すなわち横走する上下の突帯に縦に直行する突帯を貼りつけて側面を縦長の長方形区画を５区画とし、小口部は隅丸をなす角部をとり込んで、中央の縦突帯１本で２区画としている。身部の内径は、展示されている現状の計測では底部全長197cm、蓋のない小口側の底部幅59cm、身切断底部幅56cm。身部の深さ50～52cmで上端は内傾し切断部の内法幅52cmである。蓋部は二分割された内の蓋受けを有する半個体が完存している。この蓋部の特徴的なことは、



第１図　万燈山古墳石室実測図（S=1:100）（注４一部改変）

第２図　陶棺

第３図　万燈山古墳出土　梔子形空玉

①蓋受け部は、粘土を薄く削り出した形態の受け部を作り出しているが、その接合する蓋本体の表面は頂部から側面にかけて、接合部に沿ってやや細い突帯を貼っている。しかし、ここでは②などに見る突起はない。②頂部（棟）を横走する突帯は、小口部側面まで貼り付けているが、蓋の下部突帯までは達しなくて、下方にある円柱形突起で終っている。③蓋側面は、頂部（棟部）からほぼ直角に分かれる三本の縦突帯を貼り付けている。しかし、縦突帯は小口部同様に蓋下端までは達してなく、下方の円柱形突起で終えている。④突起は、現状では側面３＋３、小口部１で計７個を確認できる。欠損蓋を推定すれば総計 14 個となる。その形状は円柱形で、頂部平坦面径６～6.5cm、着装部径6.5 ～ 7cm、突出部長 6.8cm 程で、太く存在感をもった差し込み突起である。⑤蓋の表面は、突起上方に径７ｍｍの竹管文をまばらで不規則ではあるが、突帯上をふくめて横一列に押し、蓋の表面を飾っている。⑥小口側の横走する頂部（棟部）突帯とそれに交差する縦位に下る突帯の交差部の二方向には、短い角状の突帯を小口側に斜行させて貼り付けている。この突帯は幅 2.5 ～ 3.5cm、長さ７～ 9cm である。類例を知らない装飾の蓋である。陶棺は、横田美香の分類ではＢ系 -a で、編年は４段階とされている（注６）。

５、万燈山古墳出土の梔子形空玉

万燈山古墳出土の梔子形空玉は完型をなすものは１点もない。現状は元楕円形状を推定させる個体の中央の接合部で二分割に割れ、側面からみると稜をもった半球状を呈している。上面からみると中央頂部の孔を中心に八稜からなるもので、いわゆる８割玉である。この半個体となっているものが現在９個と、半球状もとどめない破片が 20 片前後ある（第３図）。概報（1973）にいう「空玉銀製 15 ～ 16」は、完型か半個体かはよくわからないが、現状を見るとおそらく半個体に割れた数と思われる。いずれにしろ完型であっても複数個体の銀製梔子形の玉飾りであったことは確かである。展示された状態での１半個体の計測は割れ部最大径 13mm、高さ 10mm ある。厚さは非常に薄い。頂部の孔は約 2mm で９個体とも半球体の内側から外側に向けて穿孔している。色調は、裏は白銀色を残しているが、表面は個体によっては部分的に白銀色を見るが全体としてはやや黒ずんだ灰色である（注７）。

６、岡山県内における空玉出土古墳

岡山県内における空玉出土の古墳は、万当燈山古墳の他に次の２基がある。以下それらの概要を記す（第

第４図　空玉出土古墳位置図

４図)。

①八幡大塚二号墳

八幡大塚二号墳は児島半島の北側の児島湾沿岸にあって、旭川河口を東北近くに望む標高 38 ｍばかりの丘陵の頂部に立地する。この地は古くは吉備の穴海といわれた児島湾と瀬戸内海をむすぶ海上交通の要地で、吉備津や想定される児島津をおさえる格好の位置にあたる。現在の行政区画では岡山市南区北浦に属する(注8)。古墳は径 35 ｍ、高さ７ｍの円墳で、南に開口する右片袖式の横穴式石室を内包していた。石室は全長 10 ｍで玄室長６ｍ、奥壁幅 1.8m を測り、玄室面積は 10.8㎡である。空玉は、玄室内の奥壁よりに安置されていた竜山石製の組合式家形石棺内の南側で発見されている。その位置は被葬者の頭部に当たる付近で金製垂飾付耳飾り一対が出土しているが、このあたりから下方にかけて銀製で鍍金のある空丸玉が出土している(注9)。現在みられる空玉は完型品２個、割れて半球形を呈している半個体が 23 ～ 34 個である（第５図)。半球形個体の一部の計測は、割れ部の最大径 14 ｍｍ、高さ８ｍｍである(注10)。この古墳は出土須恵器から六世紀後半の築造とされている。古墳は 1972 年６月から８月にかけて破壊された(注１１)。石棺は岡山県立博物館入口に展示されている。出土遺物は文化庁所有となり、現在は岡山県立博物館で保管し、須恵器等の遺物の一部は順次展示している。

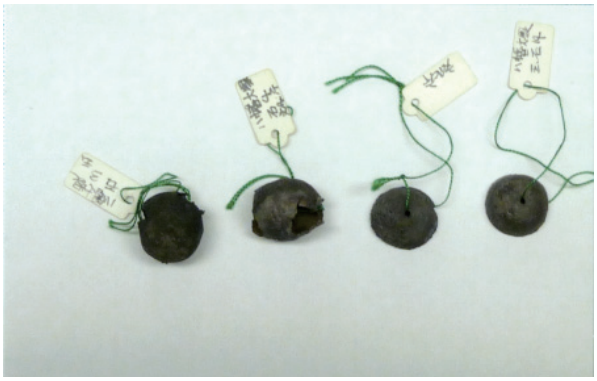
②上道北方塚段１号墳

上道北方塚段１号墳（以下塚段１号・同２号墳は塚段２号と略記する）は、旭川東岸の広い沖積平野から東に抜ける東西に浅く長い谷地形を南にみる、丘陵の緩斜面に立地している(注12)。現在の行政区画では岡山市中区上道北方に属する。古墳は墳丘をすでに削平され畑地として利用されていたようで、果樹園整備に伴う事前調査で横穴式石室の基部石材の一部とその抜き取り痕跡を発見した。埋葬施設の横穴式石室は左片袖式で、確認できる石室全長は 9.4m で、西向きに開口する。玄室長 4.9m、奥壁部幅 2.1m、羨道長 4.5m、同幅 1.5m である。玄室面積は 10.29㎡である。出土遺物をみると銀製空丸玉３個（第６図)、重層ガラス玉、ガラス玉、ビーズ玉多数、埋木玉などの装飾品が出土している(注13)。銀製空丸玉の１個は穿孔のある上下の部位で 15mm、対する左右は 14.5mm を測る。重さは３個とも２グラムである(注14)。出土須恵器から六世紀後半の築造とされている。付近一帯は古くから畑地として土地の改変を受けているとはいえ、周知の古墳はほとんど知られていないようだ。六世紀後半になって初めて塚段１号・同２号墳他６基が築造されているようだ。そういった歴史的背景にある古墳として１号墳出土の空丸玉や重層ガラス玉は重要な意味をもつ遺物であるといえる。

７、万燈山古墳出土の梔子形空玉の位置づけ

岡山県内で空玉の出土の古墳は、先述したように旧備前国で２古墳、旧美作国１古墳と限られた分布の状況を示している(注15)。備前の２古墳は、いずれも片袖式の横穴式石室である。石室全長は 10 ｍに満たないものもあるが、玄室面積は 10㎡を保持しているので、それぞれの地域にあっては大型石室墳に準ずる古墳といってもよい。万燈山古墳はこれらと比べると石室規模は一回り大きく、石室全長 12m、玄室長 6.5 ｍ、奥壁幅 2.45 ｍである。玄室面積は 15.9㎡あり、美作地方にあってはその規模は最大級である。

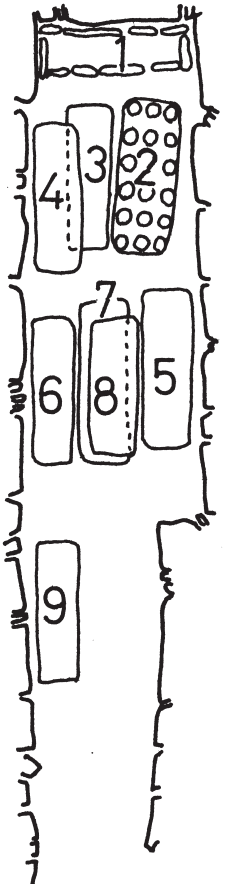
埋葬棺からみれば、八幡大塚２号墳は竜山石製の組合式家形石棺から出土しているので、空玉保持者は古墳築造時の第一被葬者と推察される。その被葬者は共



第５図　八幡大塚二号墳出土　空丸玉（撮影河本）

第６図　上道北方塚段１号墳出土　空丸玉
（岡山市教育委員会提供）

伴出土の金製垂飾耳飾りと鍍金した銀製空丸玉で首部から胸部をキラビヤカに飾り、しかも長大な大刀などの武具をもった華やかな被葬者像がイメージ化される。その権勢はヤマト政権中枢との交流関係を抜きにしては考えられない。また一方上道北方塚段１号墳出土の銀製空丸玉は、複数埋葬のどの埋葬棺に伴うか詳細は不明であるが、金属製の空丸玉の他に重層ガラス玉や埋木玉などの出土からみとヤマト政権中枢層との交流を強めるなかで台頭した被葬者像が読み取れる。万燈山古墳出土の梔子形空玉の被葬者は土師質亀甲形陶棺内３体埋葬の内、奥壁側に頭位を置いた２遺体のどちらかに着装されていたようだ。もともと人骨の遺存状態は良くなかったようであり、その上、後世の盗掘を受けているので、その詳細は追認できない。万燈山古墳は、築造時の第１次埋葬施設として組合式箱式石棺を選定した。六世紀後半と推定される。第２次埋葬施設は陶棺とされている。そして、３次から９次にかけて木棺を安置し、埋葬遺体は合計22体とされている。（第７図）梔子形空玉を保持していた被葬者は古墳築造時に埋葬されたものではない。想像をたくましくすれば石棺に埋葬された第１次被葬者の為に古墳築造に深くかかわり、その上、その祭式を指揮した人物の１人とも推察される。いずれにしろ美作地方最大級の横穴式石室に埋葬され、しかも、美作地域独特の亀甲形陶棺を埋葬棺としている点に、地域性を強く意識しながらもヤマト政権中枢との関係を抜きにして考えられない被葬者像を推察させる。これらの古墳は、旧来の吉備中枢の圏域からやや距離を置いた、いわば新興地といえる地や新たに海上交通の権益を入手した新勢力の台頭を推察させる古墳といえる[注16]。表１にみるように



第７図　棺の埋葬順序

現時点では、中国地方で空玉を出土している古墳は岡山県以外では島根県松江市所在の岡田山１号墳[注17]と広島県庄原市所在の唐櫃古墳[注18]のみである。岡田山１号は後方部に両袖式横穴式石室を埋葬施設とした墳丘長24ｍの前方後方墳である。空玉は奥壁よりの家形石棺から金銅製空丸玉16個以上が出土している。六世紀後半の築造とされる。唐櫃古墳は墳丘長41ｍの前方後円墳で後円部の埋葬施設は「片側玄門立柱石」による右片袖式横穴式石室である。石室全長13.1mは広島県内では最大級とされる。玄室内出土の銀製梔子形空玉は１個である。出土須恵器から本古墳は六世紀後半に築造され七世紀後半までに３回以上の追葬が行われたとされている。これら二基の古墳はいずれも前方後円墳秩序からみれば上位の墳丘形態をもつ首長墓である点が特筆される。兵庫県多可郡所在の東山古墳群は16基からなる古墳群で、その築造は七世紀初頭から後葉にかけてのものとされる。そのうち東山１号墳[注19]からは銀製空丸玉３個出土し、東山10号墳[注20]からは銀製梔子形空玉８個出土している。いずれも大型の横穴式石室で石室形態は片袖と両袖の違いがあるが、群中で最大規模とそれに準ずる規模のものである点が注目される。調査者菱田哲郎氏は「のちの郡領層につながる人々の奥津城」[注21]と評価している。とすれば空玉を保持した被葬者はそれらの有力な候補者層とも推察されよう。奈良県藤の木古墳は密閉されていた家形石棺から２人の被葬者と華麗で豪華な副葬品が数多く発見された。いずれの被葬者も空玉を出土しているが、北側被葬者は銀製鍍金空丸玉、同梔子玉、空勾玉などである。対する南被葬者は銀製空丸玉で鍍金されていない。調査者の１人前園実知雄氏はこれら被葬者の着装遺物の違いから鍍金された空丸玉や梔子形空玉を着装した北側被葬者を上位の立場に当たるものと指摘している[注22]。同じ空玉でも鍍金製と銀製、梔子玉と丸玉には製作の違いだけでなく、そこにはそれを着装した、あるいは保持する被葬者の身分差を表しているように見受けられる。万燈山古墳の銀製梔子形空玉はそういった意味で鍍金製ではないが示唆的な遺物として評価される。本古墳の北約1.5kmの位置に所在していた室尾石生谷口古墳は1979（平成９）年に調査された無袖の横穴式石室墳（石室全長8.5m）であった。報告者は、出土須恵器（TK43～TK217）からその築造や追葬の時期は万燈山古墳

と重なる部分が多いと指摘する。六世紀後半から七世紀前半である。さらに玉類は数の上では互角だとするが、その中には空玉は所在しないばかりか万燈山古墳出土の方がよりすぐれている、と指摘している[注23]。万燈山古墳はこれら室尾石生谷口古墳の上位にたつ古墳として、石室構造や規模のみならず副葬品においても格差をもっていたことは明らかである。そうした地域での権勢を力にヤマト政権中枢との繋がりを強めるなかで銀製梔子玉を入手したものと推察される。

５世紀を特徴づける渡来系遺物である金属製の空玉は奈良県新沢千塚126号（５世紀後半）出土の金製・銀製空丸玉などをはじめとして、その後各地の主要な古墳からの出土が知られている。一方、梔子形空玉は日本列島では六世紀中ごろ（TK10）前後にその出現期があるようである[注24]。朝鮮半島での梔子形空玉の起源についてはよく知らないが、亀田修一氏のご教示によれば韓国武寧王陵（紀元523年没）の王の腰佩近くから出土している金製蜜柑形空玉72個が著名なようである[注25]。その導入経路等についてはよくわからないが、先学が指摘しているように５世紀から６世紀にかけての国内での金工技術の進展は渡来人や渡来技術の導入をぬきにしては考えられない。ヤマト政権中枢におけるこれら金工工房の生産形態や組織にも興味がわくが、地域にあっては空丸玉や梔子形空玉などを含む金属装飾品の地域への下賜あるいはその流通のあり方などに課題が残る。

本稿の執筆にあたり貴重なご教示やご支援、ならびに資料の検索などを、下記の方々や機関からご援助をいただきました。記して感謝の意を表します。

扇崎　由、岡田　博、小郷利幸、亀田修一、狩野久、佐藤寛介、澤田秀実、島崎　東、角南勝弘、高橋進一、田村啓介、豊島雪絵、仲井寛明、仁木康治、根木修、長谷川一英、平井典子、平井泰明、平岡正宏、松尾　佳子、松本和男、宮原文隆、村上幸雄、安川豊史、行田裕美

岡山県立博物館、岡山県古代吉備文化財センター、岡山市埋蔵文化財センター、総社市埋蔵文化財学習の館、津山弥生の里文化財センター、加茂町歴史民

古墳名	所在地	形・規模	袖	石室長	玄室			羨道			棺	副葬品
					長	幅	高	長	幅	高		空玉・その他
万燈山古墳	津山市	円・24	左片	12	6.5	2.45	2.75	5.6	1.8	2	陶棺	梔子形半個体９・破片多数
八幡大塚２号墳	岡山市	円・35	右片	10	6	1.8	2.4	3.3+	1.1	1.6	石棺	銀製鍍金空玉２・半個体24
塚段１号墳	岡山市	不明	左片	9.4	4.9	2.1		4.5			木棺	銀製空丸玉３
岡田山１号墳	松江市	方・方24	両	5.6	2.8	1.8	2.2	2.4	1.1	1.2		金銅空玉16 +
唐櫃古墳	庄原市	前・方41	右片	13.1	7.2	2.1	2.5					銀製梔子形空玉１
毘沙門１号墳	垂水区											銀製６
西脇丸山２号墳	加古郡	円・20	右片	8	3.5	1.5		4.5	1.2			金銅製空玉３＋破片
宮山古墳	姫路市	円・30	竪穴式石室									金製空玉28
西宮山古墳	竜野市	前・方34.6	左片	8.71	3.7	3.27						銀製空玉３
東山１号墳	多可郡	円・30	左片	12.5	6.25	2.8	3.3	6.25	2.1			銀製空玉３
東山10号墳	多可郡	楕円・20	両	12	6.2	2.1	2.2	5.8	1.6	2		銀製梔子形８
勝福寺古墳	川西市	前・方41	右片		4.7	2.3	2.4	前方部南棺出土				完形33・半個体12全て梔子形・銀製鍍金品21・銀製品18　TK10
箱塚４号墳	篠山市											銀製空玉
春日古墳	朝来郡											銀製梔子形１
和田山８号墳	栗東町	円・11	両	5.7	2.85	1.4		2.85	1.15			TK209/217　金銅製空玉９
播磨田東遺跡	守山市	木棺墓	2.6 × 0.9									金製空玉２
物集女車塚古墳	向日市	前・方48	右片	11	5.09	2.8	3	5.83	1.5	1.7	石棺	銀製空玉3+ 破片大小有
元山神社古墳	三重県											梔子形空玉
車駕之古址古墳	和歌山市											金製空勾玉１
海北古墳	茨木市											銀製空勾玉４
芝山古墳	東大阪市	前・方30	両	5.6	3.8	3.1	2.4	1.8	1	1.5		銀製空玉17
山畑48号古墳	東大阪市	不明	横穴式石室									銀中空玉
珠金塚古墳	藤井寺市	方28	粘土槨									金空玉12
市尾墓山古墳	高取町	前・方66	右片	9.5	5.9	2.6		3.6	1.7		石棺	銀製６
新沢千塚126号	橿原市	長方22 × 16	木棺									金製２・銀製28
慈恩寺１号墳	桜井市	前・方？	木棺直葬									両端にガラスをはめ込んだ銀製中空勾玉５、銀製空玉30
藤ノ木古墳	斑鳩町	円・50	両	13.9	6.04	2.43	4.41	8.28	2.08	2.38	石棺	TK43　銀製鍍金空玉・銀製鍍金梔子形ほか
ホリノヨ４号墳	天理市	円										銀空玉
兜塚古墳	桜井市	前・方										銀空玉
牧野古墳	北葛城郡	円・50	両	17.1	6.7	3.3	4.5	10.7	1.8	2.2	石棺	TK209　金銅製梔子玉８＋28
伏原大塚古墳	香美市	方・43 × 38	横穴式石室									TK10・TK43・TK209　梔子形空玉

表１　空玉出土古墳一覧[注26]（近県のみ）

俗資料館、兵庫県多可郡多可町那珂ふれあい館。

また、執筆の契機をいただいた加茂郷土史研究会特別会員頭士倫典、会長美土路有蔵、事務局長前原成正には記してお礼を申します。

注

1）岡山県教育委員会『改訂岡山県遺跡地図』＜第７分冊＞2003　加茂町地図番号 83 番である。
2）苫田郡加茂町は 2005（平成 17）年に津山市に合併する。
3）渡辺健治・今井尭『万燈山古墳』岡山県苫田郡加茂町文化財保護委員会　1973
以下「概報（1973)」と記す。
4）植野浩三・角南聡一郎ほか『万燈山古墳測量調査実績報告書』奈良大学文学部文化財学科　1995
5）「・・」は注３より引用
6）横田美香「吉備地域の土師質亀甲形陶棺」古代吉備　第 24 集　古代吉備研究会　　2003
7）津山市教育委員会　小郷利幸氏には遺物（主として須恵器・空玉）の実見ならびに写真撮影・計測や石室の観察で便宜とご教示を頂いた。
8）岡山県教育委員会『改訂岡山県遺跡地図』＜第６分冊＞2003　岡山市地図番号 2466 番にあたる。
9）鎌木義昌、亀田修一「八幡大塚二号墳」『岡山県史』第十八巻　考古資料　　岡山県　1986
10）岡山県立博物館　島崎東氏立会の上で実見し、計測と写真撮影の便宜とご教示を頂いた。
11）「八幡大塚古墳の経過について」『岡山県埋蔵文化財報告３』頁 29　岡山県教育委員会　1973
12）岡山県教育委員会『改訂岡山県遺跡地図』＜第６分冊＞2003　岡山市地図番号 1801 番である。
13）『上道北方坂口古墳・塚段１号墳・塚段２号墳発掘調査』岡山市教育委員会　1986　現地説明会資料
14）岡山市教育委員会　扇崎　由氏には遺物の実見ならびに写真撮影・計測等の便宜を頂いたほか資料の援助とご教示を頂いた。
15）高橋進一「玉作り遺跡と玉製品」近藤義郎編『吉備の考古学的研究下』山陽新聞社 1992　このことは 1992 年に指摘されているが、その出土状況は現在も変わっていない。
16）注 15 に同じ
17）三宅博士・松本岩雄ほか『出雲国岡田山古墳』島根県教育委員会　1987
勝部　昭「岡田山古墳群」『松江市史　史料編２考古資料』松江市　2012
18）稲垣寿彦・今西隆行ほか『広島県史跡　唐櫃古墳』広島県庄原市教育委員会　2000
19）京都府立大学考古学研究会『東山古墳群』中町文化財報告 20　兵庫県多可郡中町教育委員会　1999
20）京都府立大学考古学研究会『東山古墳群Ⅱ』中町文化財報告 25　兵庫県多可郡中町教育委員会　2001
21）菱田哲郎『古代日本国家形成の考古学』京都大学学術出版会　2007　頁 142
22）前園実知雄『斑鳩に眠る二人の貴公子　藤の木古墳』新泉社　2006　頁 47・64
23）小林利晴・内藤善史『室尾石生谷口古墳ほか』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告　133　岡山県教育委員会
24）岡野慶隆・寺前直人・福永伸哉『川西市勝福寺古墳発掘調査報告』川西市教育委員会　2006　頁 173
25）大韓民国文化財管理局『武寧王』日本語版監修金元龍・有光教一　翻訳永島暉臣愼　学生社　1974
26）表の作成にあたっては報告書・論文からの孫引き・辞典・その他から検索した。原典（報告書）に当たれないものが多く、関係文献の掲載は失礼した。

参考文献

・町田　章『装身具』日本の原始美術　9　講談社　1979
・奈良県立橿原考古学研究所附属博物館特別展図録『1500 年のシルクロード新沢千塚の遺宝とその源流』 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館　1992
・奈良県立橿原考古学研究所編『斑鳩　藤ノ木古墳第二・三次調査報告書』奈良県立橿原考古研究所　1995
・宇垣匡雅『川戸古墳群』岡山県大原町教育委員会　1995
・乗岡実・行田裕美編『吉備の古墳』上　備前・美作　吉備人出版　2000
・新納　泉・光本　順編『定東塚・西塚古墳』岡山県北房町教育委員会　2001
・千賀　久・村上恭通『考古資料大観７』小学館　2003
・澤田秀実・持田大輔・白石純「津山市油木北　殿田１号墳の研究」くらしき作陽大学・作陽音楽短期大学『研究紀要』第 42 巻　第２号　2009
・狩野　久『発掘文字が語る　古代王権と列島社会』吉川弘文館　2010

院庄の御茶屋（雲州侯御茶屋）について－18世紀半ばの津山松平藩における宿駅整備－

乾　貴子

はじめに

近世の交通体系は五街道とその他の街道・往還筋から成り立ち、全国の城下町を結節点として形成されている[註1]。そうした近世街道の一つである出雲往来は山陽道の姫路から分岐して、津山城下を東西に貫き、出雲・松江藩へ通じる街道筋で、「姫路往来」とも呼ばれ、現在では「出雲街道」と俗称されている[註2]。

出雲往来は出雲松江藩（松平氏）・同広瀬藩（松平氏）・美作津山藩（松平氏）・同勝山藩（三浦氏）・備中新見藩（関氏）の５藩が参勤交代路として利用した。そのため、宿駅の整備はこれらの沿道の諸大名によって行われており、津山以西の出雲往来では、松江松平家が17世紀後半から18世紀前半にあたる寛文～宝暦年間にかけて藩主専用の「御殿」・「御茶屋」と呼ばれる休泊施設を設置して宿駅の整備を推進している[註3]。

「御茶屋」とは「御殿」より小規模なものを指す呼称とされ、こうした休泊施設の機能については丸山雍成氏・中島義一氏らによる研究がある[註4]。ここで取り上げる院庄の御茶屋は、出雲往来沿いに津山松平藩が設けた藩主別邸であるが、参勤交代の途次に津山を通行した出雲松江藩主をはじめとする近隣の諸大名や、幕府役人などの休憩施設としても利用された（図１）。建物は現存していないが、最近の発掘調査では同御茶屋で用いられたと思われる石・瓦・陶磁器類などが出土している[註5]。しかしながら、同御茶屋については特に研究がなされておらず、不明な点が多い[註6]。そこで、以下では同御茶屋の設置年代、規模・建物配置、機能等、施設の概要について検討したい。

１．「院庄往還」の成立

院庄の御茶屋の成立について検討する前に、院庄を通過する出雲往来の形成過程についてみていくことにする。

津山藩では慶長８年（1603）の津山城の築城とともに城下町の建設が始まり、17世紀後半頃には城下町が完成している。出雲往来は城下町を東西に貫いた後、西に向かって延びてゆき、まもなく城下と院庄とを結ぶルートが開通している。津山松平藩はこのルートを

図１院庄御茶屋推定地およびトレンチ配置図
（S=1:4,000・『院庄構城跡』2013より）

重視して、「院庄往還」と呼んでいる。

院庄往還は17世紀末頃までに成立している。それまでの経過をみると、慶安元年（1648）には松並木と一里塚を設けた「菅縄手」が開通している（『美作略史』巻之三）。この縄手道は、元和７年（1621）に発生した吉井川の氾濫により、城下町の西方に位置する二宮丘陵の麓に新たな平地が形成されて開発が可能となったものである。

以降、院庄往還の整備が進み、17世紀末頃に成立した「神戸院庄之図」『美作国内社寺郷邑見取図』（津山郷土博物館所蔵）には、院庄往還の沿道に町並みが発達した様子が描かれている。また、貞享５年（1688）には津山藩によって整備された院庄館跡に至る直線道も開通している（『新訂作陽誌』一　苫西郡古跡部　神戸郷）。元禄４年（1691）に成立した『西作誌』（『新訂作陽誌』に合本）には、院庄は宿駅の合間に立地する「間（あい）の宿」として発達したと記されている。

『新訂作陽誌』一　苫西郡郷邑部

院庄村　諺曰作州府院庄四方高而地塞即此地也津山至二邑之制札所一一里十二町出雲石見伯耆備中備後往来旅人毎次二于此一但非二駅傳一

院庄御茶屋が絵図に姿をあらわすのは、院庄往還成立後の18世紀末のことである。天明２年（1782）に成立した絵図には、同御茶屋が院庄往還沿いの集落の

図２　「天明二年（1782）西々条郡神戸院庄二宮村之図」（部分）
矢吹家資料・弓斎叢書 302、津山郷土博物館所蔵

ほぼ中央に描かれている（図２）。同絵図からは院庄が津山の城下に至る西の玄関口として賑わいを見せるようになった様子が読み取れるが、宿場町として繁栄した背景の一つとして、松江藩主が参勤交代路を変更して、出雲往来を利用し津山城下を通行するようになったことがあげられる。それ以前の松江藩主は院庄・二宮・押渕から水路を利用して備前三石に出ている（『美作略史』巻之三、『作陽誌』久米郡北分山川部久米庄、『同』勝南郡飯岡郷吉ヶ原村）[註7]。

『美作略史』巻之三

慶安元年戊寅菅縄手官道成。郷村沿革繪図。
先レ是、官道ハ津山ヨリ藪ノ鼻ヲ経テ二宮村ニ出ヅ、元和中津山川南ニ變シテヨリ、小径ヲ其蹟間ニ開キ、筋違道ト稱ス、至是其往復ニ便ナルヲ以テ始テ官道ト為シ、茶肆四戸ヲ置キ、皆其地租ヲ免ス、初ノ出雲國主堀尾、松平氏等、江戸ニ詣ル毎ニ、久米北條郡宮尾村ヨリ、錦織、佐良、種、大戸ノ諸村ヲ経テ、備前三石ニ出ヅ、是ヨリ道ヲ此ニ取リ、津山ヲ過ギテ、播磨ニ出ヅ、

『新訂作陽誌』二　久米郡北分山川部久米庄

院庄川　上二従苫西郡院庄一流来過二宮尾久米川南村端一下入二長岡庄一有レ潭名二赤岩淵一渡口謂二濱前一蒿師常設レ艇屈レ冬架二土橋一雲州大守東行時毎従レ是上レ舟到二吉原一

『新訂作陽誌』五　勝南郡飯岡郷吉ヶ原村

本陣　源泉公の行營たりしと云ふ亦雲州侯川舟にて下り給ふ時の旅館なり爾来絶て其事なし主人妹尾六兵衛と云ふ子孫絶て今平尾平左衛門某舊宅を継重屋（しげ）と稱す以後新見侯止宿の事あり

以上のように、院庄往還は津山の城下町の形成後に成立したと考えられる。ただし、同御茶屋に隣接する構城跡の発掘調査によると、同外堀は近世の院庄往還に接する位置にあることが確認されている。このことから、戦国期の構城の構築時以来の道筋が、近世的な街道に発展したものである可能性があるが、街道沿いの集落については、構城の外堀上に形成されていることから、戦国期の系譜に連なるものではないと考えられる[註8]。実際、院庄以西の出雲往来は古代・中世の官道とは異なるルートをとり、沿道の集落は院庄と同様に微高地に形成されている[註9]。こうした点からも、江戸時代以降に全国的道路体系が成立する中で、分国的道路体系とは異なる新しい街道筋の整備が計画的に進められ、院庄往還が成立した状況が読み取れる[註10]。

江戸時代後期になると、院庄往還筋の風景は津山城下を代表する名所の一つに数えられるようになる。文政 11 年（1812）に成立した俳諧集『秋風塚』の巻末に、「鶴山下八景」と題する名所図会が収録されており、その中で院庄往還筋の菅縄手（「菅縄手晴嵐」）、院庄（「院庄落雁」）が八景の一つに選ばれ、その景観が大いに賞賛されている[註11]。『秋風塚』は蕉門下の山本鬼角（久米郡馬伏村、旧柵原町宮山の人。「巖峰亭社中」主宰）が津山城下の東方にあたる深淵（ふかさこ）（津山市河辺）に芭蕉供養碑を築いた時に編纂したもので、京都の書肆・蕉門書林で上梓されている。同書に収録する「鶴山下八景」は、津山藩御用絵師・狩野如真（完信）の筆による城下の八つの風景画とその風景に因んだ俳諧とで構成されている[註12]。

２．院庄の御茶屋の概要

a. 設置年代

この時期の津山における本陣・御茶屋の整備については、宝暦年間における松江藩主による出雲往来の宿駅整備の動きとの関連性を考える必要があるだろう。『町奉行日記』によると、宝暦７年（1757）10 月に津山城下の大年寄を勤めた玉置家では、松江藩主の城下

通行の知らせを受けて、玄関を広く設け、湯殿を増築するなどの普請が行われ、本陣としての体裁を整えているからである。

そこで、院庄の御茶屋の設置年代について検討したい。同御茶屋の設置を示す具体的な史料は見当たらないが、宝暦12年（1762）３月に藩主の娘２人が清遊に訪れたという記事が『町奉行日記』にあり、これが早い時期の史料となっている。また、その３年後の明和２年（1765）には、松江藩主の通行の便宜を図って、同御茶屋前の往還筋の拡幅工事が行われている（「明和二酉年（1765）年六月（院庄）御茶屋御道具預り帳（写）」津山松平家史料、津山郷土博物館所蔵）。そして、翌３年８月には、松江藩主松平宗衍（6代）・治郷（7代）父子が院庄御茶屋に立ち寄っている（『町奉行日記』明和３年８月25日条）。『町奉行日記』によると、これが松江藩主による最初の同御茶屋の利用を示す記事である。したがって、少なくとも史料を初見する宝暦12年までには、同御茶屋が藩主の別邸として設置されていたものと考えられる。

なお、享保７年（1722）成立の「久世町絵図」によると、当時は津山藩領であった久世宿に津山藩の「御殿」、「御茶屋」が描かれている。ところが、享保11年（1726）に同藩が10万石から５万石に減封され、久世宿が幕府領となると、幕府と津山藩の共同経営に移行している。次いで、宝暦６年（1756）に久世宿の本陣景山家が松江藩の本陣を請負うようになると消滅している（『久世町史』）。その直後から史料に登場することになる院庄御茶屋は、５万石時代の津山藩領の西の領境に位置している。

『町奉行日記』宝暦12年（1762）３月28日条

一昨日五半時御供揃ニ而院庄御茶屋江於直様於秀様被遊御出候御道筋此間之通也（後略）

『津山藩町奉行日記』宝暦７年10月13日条

一出羽守様御病気付御出府被遊候旨去ル月十九日大年寄共方ヘ足軽竹下円蔵と申者罷越当町御泊リ被成度旨大年寄申出ル依之御用番兵右衛門殿罷越御伺申上御本陣玉置忠兵衛ヘ申付候

右御用懸リ御用番兵右衛門殿大目付渡辺惣馬

一忠兵衛御湯殿無之ニ付願申立ル右宅為見分

一大目付渡部惣馬鈴木喜右衛門町奉行井上弥三兵衛御作事役人石垣伝太夫池部八右衛門御目付三浦十郎左衛門大工棟梁両人罷越見分及評議候

一廿五日松江江大年寄ゟ飛脚遣竹下円蔵方ヘ御普請方并日限等承合候弥御泊ニ相成可申旨書状来ル

一御本陣向之儀中奥目付大沢三平ヘ御用懸リ被仰付候間御本陣難心得事ハ相談可申旨惣馬ゟ被仰渡候三平ヘも申合ス

一下宿之事京町ゟ二町目二階町元魚町ヘ申付ル心用意仕様申渡ス

一御本陣御普請御作事ゟ出来ル御湯殿閑所畳ニ表替ヘ御居間拾弐畳次拾畳替ル御玄関入口広ク申付ル

一御本陣拝借道具書付出ス大目付所指出ス

一十月九日御先触至来十一日松江御立十二日ニ新庄御泊リ十三日津山御泊旨申来ル

一九日惣町御道具筋見分罷出ル在分一所ニ見分致候

一御泊ニ付諸事取斗之儀以書付相伺候御付紙ニ而戻ル文言末ニ有之

一同所ニ注進致方伺書出ス

一御本陣十二日迄御普請相済絵図有之

「明和二酉年（1765）年六月（院庄）御茶屋御道具預り帳（写）」津山松平家史料（愛山文庫Ｃ５）、津山郷土博物館所蔵

「明和二酉年　院庄御茶屋道前廣ヶ伺書　墨引添」（端裏書）

覚

御茶屋之前

一往還切廣ヶ　東西長弐拾壱間 横幅弐間

此坪四拾弐坪

右者雲州様御往来之節御茶屋

馬場先キ候故御着御立之砌人馬

込合混雑仕候ニ付右之通往還北端切廣

申度奉存候存者御引地積リ仕奉入

御内見候御見分之上御裁許奉願上候

已上

明和二酉年六月　院庄御茶屋守肝煎 庄兵衛（印）

院庄村庄屋 幸右衛門（印）

同 儀兵衛（印）

平八（印）

b. 構造・規模

院庄御茶屋の構造・規模を知る手がかりとして、天明２年（1782）成立の村絵図（図３）、明和２年（1765）

図３　「天明二年西々条郡神戸院庄二宮村之図」（院庄御茶屋部分拡大）
矢吹家資料・弓斎叢書 302、津山郷土博物館所蔵

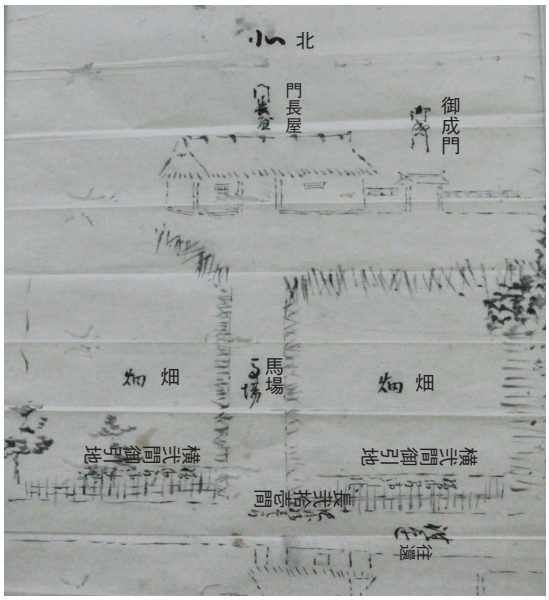


図４　「明和二酉年（1765）年六月（院庄）御茶屋御道具預り帳（写）」
津山松平家史料（愛山文庫Ｃ５）、津山郷土博物館所蔵

成立の御茶屋の略絵図（図４）の２点があげられる。図５は明和２年に御茶屋前の往還において、東西 21 間・横幅２間（計 42 坪）を松江藩主通行の便宜を図って拡幅した時に作成された書付である。

図４によると構城跡の東隣に長屋門を設けた庄屋構えの屋敷が描かれている。往還筋から少し入った通りに面して２つの門があり、それぞれ「長屋門」と「御成門」と表記されている。往還筋と御茶屋との間には駕籠立の際に用いられたのではないかと思われる「馬場」が設けられている。塀で囲まれた敷地内には、主屋と附属屋がみえる。敷地内には塀で仕切られた小庭があり、その庭に面して主屋が建てられている。

主屋は迎賓用、附属屋は御茶屋守の居住空間として用いられたものと考えられる。また、藩主などの賓客は御成門から敷地に入り、露地門を潜って主家に通され、その随行者は附属屋に設けられた式台・玄関から入ったのであろう。絵図と地籍図とを照合すると、敷地面積はおよそ 1,180 坪と推定できる。

同御茶屋は本陣と同様、藩主専用の休憩・宿泊施設であり、門・玄関を設けた建物となっている。施設の性格や建物の格式からみれば、御茶屋と本陣との違いはあまり明確ではない。仮に本陣の類型に当てはめると、往還筋に面していない点では「後退型」であるが、塀で囲まれている点では「遮蔽型」ということになるだろう[註13]。

なお、平成 19 年度の発掘調査では、江戸時代の石、瓦、陶磁器類が出土したほか、同御茶屋の遺構と考えられる溝の一部を検出している。遺物は、時期的にみて同御茶屋で用いられたものと考えられる。また、溝状の遺構は、位置や形状からみて、同御茶屋の敷地内の庭園にある池の遺構ではないかと推定される。この遺構は、トレンチの東端で落ち込むような形状となっている[註14]。

また、航空写真からみた同御茶屋周辺の地割の様子と、発掘調査により確認された土層の状況を検討すると、同御茶屋は氾濫原に立地している。しかしながら、同御茶屋の背後は、街道沿いに比べて土地がやや高くなっており、そこに広い境内を持つ寺院（高野山真言宗　極楽山清眼寺）が営まれている[註15]。立地条件からみて、同寺は洪水などの災害時の避難所としての機能を持たせていたものと考えられる。類例として、周辺の寺院を非常時の「御立退場所」に設定した久世本陣の事例があげられる[註16]。

c. 機能

院庄御茶屋は「雲州侯御茶屋」とも呼ばれている[註17]。この呼称は 18 世紀半ばの宝暦年間に出雲往来沿いの新庄・久世・美甘宿に設置された松江藩主専用の本陣でも用いられている。ただし、同じ呼称を持つ新庄宿の本陣（佐藤家）や久世宿の本陣（景山家）は松江藩と請負契約を結んだ民間施設であるのに対して、

院庄御茶屋は藩主別邸として営まれ、庄屋の中から選ばれた御茶屋守を常駐させた津山松平藩の施設であり、新庄・久世のそれとは経営形態が異なる[註18]。

管理体制についてみると、院庄御茶屋には大庄屋または中庄屋古役の者より選出された「院庄御茶屋守」が常駐している。御茶屋守には門松・御合御免の身分的特権が与えられ、往還筋の業務全般と御茶屋の管理と運営が委任されている（『御定書』十九院庄村御茶屋守、門松・御合印御免之訳）。こうした管理体制は津山藩独自のものではなく、西日本各地の本陣・御茶屋に広くみられるものである[註19]。

津山松平藩の職制をみると、院庄御茶屋守は郡代の支配下に置かれている。『町奉行日記』によると、実務は多岐にわたり、院庄川の監視活動（河川の状況、川留の通報など）や、諸大名の通行の連絡やその送迎の準備（清掃・巡視等）などを行っている。諸大名が通行する際には、御茶屋守は郡代へ関札（宿泊する本陣に掲げる木製の名札）が到着したことを注進する役割を果たしている（『町奉行日記』寛政７年５月７日条）。

機能面における特色の一つとして、同御茶屋は本来的には藩主やその一族が清遊先の休憩所として利用するために設けられた施設であるが、そうしたことを示す記録は少なく、むしろ松江藩主の利用に関する記録のほうが多く見られる点を指摘することができる。松江藩主が休憩した際には、迎賓施設として機能しているが、この点については同御茶屋に藩の使者として郡代が遣わされて御機嫌伺いの口上を述べるなどの儀礼行為が行われていることや（『御定書』十御忌中御城着之節、勝間田駅ニ而御熨斗差上方）、御茶屋守が麻上下を着用して出仕し（『御定書』嘉永五壬子年三月佐渡守様御参府ニ付、御領分中取計向）、奉書の取次や（『町奉行日記』寛政７年５月８日条）、休憩のための諸道具の準備などを行っていることなどから窺える（「明和二酉年六月（院庄）御茶屋御道具預り帳（写）」津山郷土博物館所蔵『津山藩松平家文書』）。

また、もう一つの特色として、同御茶屋は単なる休憩施設としてではなく、人馬継立など本陣並みの機能を担っている点も指摘することができる。津山藩の記録によると、同御茶屋は「院庄御本陣」とも呼ばれており、川渡しの助郷役負担をめぐって、しばしば院庄御茶屋と対岸の中須賀との間で相論が生じていたことを示す記事が見られるからである（『町奉行日記』寛政４年９月16日条）。人馬継立は休泊施設の持つ機能というよりも、本陣の属性と呼べるものであり、院庄御茶屋が人馬継立の機能を担っていたことは明らかである。

なお、松江藩主の大名行列の規模であるが、寛政４年（1792）に津山城下を通行した松江藩主一行の人数は250人余りであり（『町奉行日記』寛政４年９月27日条）、安永９年（1780）の院庄御茶屋では馬５疋を用意している（『町奉行日記』安永９年９月７日条）。

『御定書』（『岡山県史　津山藩文書』所収）
御定書　十九　院庄村御茶屋守　門松・御合印御免之訳

一、院庄村御茶屋守之儀者先々ゟ大庄屋之内、又は中庄屋古役之もの之内取調奉伺候義ニ御座候、御茶屋守ニ御合印御免無御座候而者不都合之義茂可有御座候ニ付、以来者強而年数ニ不拘御茶屋守申付候節、門松・御合印御免被成候而可然奉存候、尤其時々可奉伺候

天保三辰十二月、伺済　「院庄（付箋）治作、御茶屋預り申付候訳取調置可申事」

『町奉行日記』寛政７年（1795）５月７日条

一出羽守様来ル十三日院庄御休御関札今日来候段郡代所ゟ通用有之候

『町奉行日記』寛政７年５月８日条

一出羽守様御通行之砌御使者取遣リ御断ニ付当年ゟ御使者取遣リ相止奉文組使ニ相成候間御使者宿不及申付右奉札院庄御茶屋守取次候様被仰付置候得共向方ニ者不存義故何方へ持参可致程も難計候間誰人ニ而も向方ゟ相達置候様大目附伊達頼母被申達候ニ付右之趣御本陣問屋迄之御使者宿并夫々懸リ之者へ無間違相心得居候様書付を以大年寄へ申渡候尤向方様御使之者何方へ可差出哉と相尋候ハヽ院庄御休ニ而御茶屋守へ被相渡候様相答候而可然旨小須賀貢被申聞候然共爰元ニ而差出度趣ニ申候ハヽ誰人ニ而も受取無遅滞貢宅へ差出候様貢被申聞候右ニ付其趣組中も相心得居可然旨小頭又六へも申渡候

「明和二酉年六月（院庄）御茶屋御道具預り帳（写）」（津山松平家史料（愛山文庫Ｃ５）、津山郷土博物館所蔵）

「明和二酉年（表紙）　院庄　御茶屋御道具預り帳　印　六月」

一御刀掛　　壱ツ
　但し箱入
一御多葉粉盆　　壱面
　但シ小道具共箱入
一御手拭懸　　弐ツ
　但し御手拭とも箱入
一御手水桶　　壱ツ
　但シ蓋柄杓共
一御湯殿桶　　弐ツ
一御湯水鑓舟　　壱ツ
一御行水手洗　　壱ツ
一御手水手洗　　壱ツ
一御下駄　　一足
一御次たはこ盆　　壱面
　但し小道具共
一膳棚　　弐組
一大火鉢　　弐ツ
一箱御番所　　一軒
一弐間橋子　　弐挟
一多葉粉盆　　五面
　但し小道具共
一生板　　弐面
　〆
一木はさみ　　壱ツ
一たはこほん　　五面
　但シ小道具とも
一あんど　　弐つ
一まくら　　弐十
一古表縁り取　　拾五枚
　〆
一手水桶　　弐ツ
一はんそう　　四ツ
一料理場遣桶　　五ツ
右之通御道具類慥ニ預り申候以上
　明和二年酉年六月　　院庄御茶屋守肝煎　庄兵衛
　　院庄村庄屋　幸右衛門
　　同　儀兵衛
　　同　平八

右之通吟味仕候處相違無御座候得者
奥書仕差上申候以上
　酉六月
　　地方目附手傳田邑　石井七郎兵衛（印）
　　地方目附一方村　植月新右衛門（印）
御郡代所

『町奉行日記』寛政４年（1792）９月16日条

一出羽守様御関札川支ニ而中渕賀ニ滞居人馬之義問屋ゟ及断候処院庄御茶屋守願出候者津山問屋ゟ右之通及断候処津受川向之義ニ候得者先方へ可申通様も無之迷惑候段願出候段大庄屋ゟ郡代所江伺出候由ニ付松岡治部助ゟ何卒無差支様ニ差出度もの二候間致吟味取計呉候様ニ申来依之問屋目附豊屋喜左衛門呼出承リ糺候処六七ヶ年以前久世手代木原勇蔵（右）衛門中渕賀庄屋治郎左衛門ゟ問屋江人馬差越候様申越御代官手代之義ニ付先役後藤守助へ相伺候処申出之通此方之持前之場所ニ而無之故可差出筋ニ無之候間及断候様差図ニ付其節者及断候是迄折々左様之頼も有之候得共例ニ相成候故及断来候中渕賀ゟ勝手次第ニ呼寄候筋ニ相心得候而者後々年之迷惑ニ相成候間以降之障ニ不相成様ニ取計度尤此度之義も中渕賀ゟ問屋へ相頼越と申筋ニも無之今日も人馬聞合ニ中渕賀江問屋ゟ人差遣候処向方ニ而者何之沙駄（ママ）も無之全く院庄本陣被相頼候義ニ而一己之働振ニいたし候事と被察左之振合ニも聢と相露れ取計候得者却而致能筋哉ニも申聞一々無余義趣以来勝手次第ニ被呼寄候様ニ相心得後々中渕賀泊引受候様ニ相成候而者弥不相済筋ニ候間左候ハヽ問屋ニ而者中渕賀之頼を不受院庄御本陣働ニ而馬雇出候振合ニ而先触之馬数御本陣迄差遣向方江者右之趣津山問屋ハ不致承引義故院庄本陣働ニ而雇出候段得与先方并中渕賀之もの共江も為申聞置尤爰元ゟ雇遣候共受前働ニ無之候間前ニ雇賃不差遣候而者参リ不申事故右足入用院庄本陣入用ニ致駄賃（銭）直ニ院庄ニ而相渡候様ニ被仰付右ニ付川端迄遣候得者例ニ相成候故川端迄ハ不差遣候間向方ゟ院庄迄ハ人ニ而も為送越候様ニ可被仰付并人足ハ院庄ニ而調候義ニ候得者爰元ゟハ不差遣候左候得者院庄本陣ハ外様之御用ハ不承義ニ候得者外々江之例ニも相成間敷間右之段御承知被下候ハヽ可申付旨及返書候処治部助ゟ承知之旨可申付由申来候付先触之馬数拾

弐疋先此度ハ差遣候様ニ豊屋喜左衛門江申付候
九月十七日

おわりに

院庄の御茶屋の施設の概要は以上の通りである。御茶屋ではあるが、本陣並みの機能と藩の総合支所的な機能とを兼ね備えた施設であったことなどを指摘した。

なお、設立までの経緯をみると、出雲往来の宿駅整備が津山藩松平家と松江藩松平家の連携によって、18世紀半ばの短期間で一挙に推進された様子がうかがえる。こうした宿駅整備における両家の連携の背景として、同じ越前松平家であるという関係性を指摘することもできる。この点に注目すれば、津山松平藩が松江藩主松平家の津山城下通行に格別の配慮を示して、城下への玄関口の院庄に御茶屋を設立したとみられるのではないかとも思われる。ただし、宿駅整備における両藩の連携に関しては、さらに史料を渉猟して、検討をする必要があるだろう。

本稿の作成にあたっては、平成19～23年度構城跡発掘調査を担当された津山市教育委員会の方々から多くの御教示を賜りました。末筆ながら御礼申上げます。

註1　大島延次郎『日本交通史概論』（吉川弘文館、昭和39年）、児玉幸多『近世宿駅制度の研究』（吉川弘文館、1957年）、児玉幸多『宿駅』（至文堂、1960年）、豊田武・児玉幸多編『体系日本叢書24　交通史』（山川出版社、1970年）、丸山雍成『近世宿駅の基礎的研究』（吉川弘文館、1975年）、同『日本近世交通史の研究』（吉川弘文館、1989年）、同『封建制下の社会と交通』（吉川弘文館、2001年）、同『参勤交代』（吉川弘文館、2007年）、渡辺和敏『近世交通制度の研究』（吉川弘文館、1991年）、丸山擁成編『日本の近世　第6巻　情報と交通』（中央公論社、1992年）等

註2　『岡山県歴史の道調査報告書』第四集　出雲往来（岡山県教育委員会、1993年））

註3　『津山市史』第四巻近世Ⅱ（津山市役所、1995年）、『日野郡史』下（大正15年）、『新庄村史』前編（新庄村、昭和41年）、『勝山町史』前編（勝山町、昭和49年）、『久米町史』上巻（久米町教育委員会、1984年）、『久世町史』（久世町教育委員会、昭和50年）、『村誌美甘』上巻（美甘村、1974年）、『久米郡史』（1955年）

註4　丸山雍成『近世宿駅の基礎的研究』（吉川弘文館、1975年）、同『日本近世交通史の研究』（吉川弘文館、1989年）、同「街道・宿駅・旅の制度と実態」『日本の近世』第6巻　情報と交通（中央公論社、1992年）、中島義一「御殿と御茶屋」（『地域』11号、1982年）渡辺和敏『近世交通制度の研究』（吉川弘文館、1991年）等

註5　『院庄構城発掘調査報告書』津山市教育委員会、2013年

註6　『津山学ことはじめ』（津山市、2000年）

註7　『柵原町史』（柵原町、1987年）、『万波家文書』（和気町教育委員会、1960年）

註8　『院庄構城発掘調査報告書』（津山市教育委員会、2013年）、平岡正宏氏の御教示による。

註9　同上

註10　安藤正人「近世初期の街道と宿駅」『講座日本技術の社会史』第八巻　交通・運輸（日本評論社、1985年）

註11　山本鬼角『秋風塚』（岡山市立中央図書館所蔵『燕々文庫』）

註12　津山藩狩野派絵師の系図については、『平成18年度特別展　津山藩狩野派絵師　狩野洞学』（津山郷土博物館、2006年）参照。

註13　大熊嘉邦『東海道宿駅と其の本陣の研究』（日本資料刊行会、昭和54年）、大島延次郎『本陣の研究』（吉川弘文館、1955年）

註14　『院庄構城発掘調査報告書』2013年、小郷利幸氏の御教示による。

註15　平岡正宏氏の御教示による。

註16　『久米町史』上巻（久米町教育委員会、1984年）

註17　『院庄誌』院庄公民館、昭和54年

註18　『久世町史』（久世町教育委員会、昭和50年）、『新庄村史』前編（新庄村、昭和41年）

註19　丸山雍成『日本近世交通史の研究』（吉川弘文館、1989年）

美作の狛犬（5）

田渕千香子

はじめに

狛犬調査を始め、早４年以上がたちました。最初は、右も左も分からない状態でしたが、調査を続ける中で、狛犬の形式や時代背景などもわかるようになりました。

さて、今回は視点を変えて、狛犬を調査するときの着眼点や、楽しみ方などを私なりに紹介したいと思います。

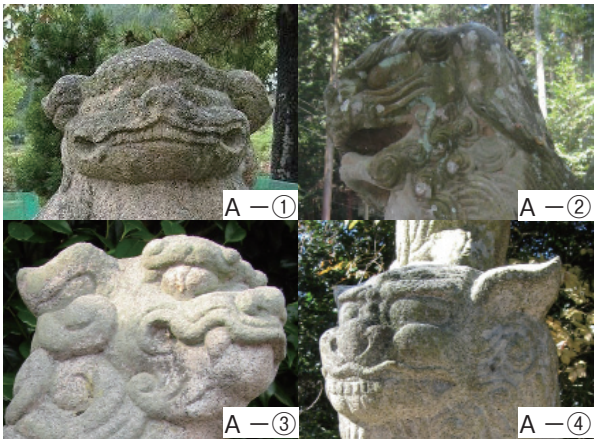
狛犬とは

神社・仏閣の参道などでよく見かける狛犬の歴史は古く、平安時代頃に発生したとされています。このころの狛犬は、木製で建物の中に奉納されていました。今、見るような石造の狛犬は江戸時代頃からのもので、左右の違いは殆どありませんが、平安時代頃のものは、角があり口を閉じているのが「狛犬」、角がなく口をあけているのが「獅子」と外見で分かるように区別されていました。この狛犬を神殿狛犬といい、後に影響を受けた石造狛犬もあります。2010 年から書いてきた『美作の狛犬（1）～（4)』では、参道に所在している石造狛犬について考察しています[註1]。

狛犬の観察

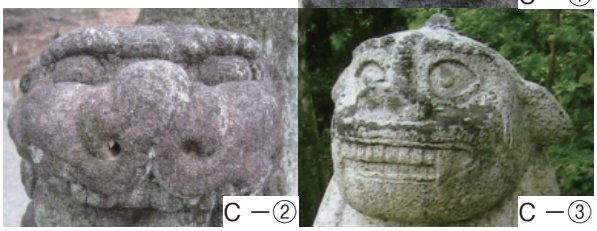
狛犬を前にして、まず目に入ってくるのは「顔」です。顔と言っても、目・耳・鼻・口・歯などに分けて見ても一個体ずつ違いがあることがわかります。たて髪や尻尾、胴体にも特徴があり、こまやかな細工の様子からは高い技術力が感じられます。また、狛犬の姿勢には、直立したもの、構えて今にも飛びかかってきそうなもの、玉乗りをしているもの等があります。さらに、台座には、年代・寄進者・石工銘・寄進理由など多くの情報が書かれています。これらの顔の形、姿勢、台座の情報などから狛犬の型式などを判断しています。また、台座本体の石材は、狛犬本体と違ったものを使用することが多く、運搬のしやすい地元の石材を用いることがよくあります。また、実際に観察を行うときに注意している事ですが、観察ノートを自作しメモをとりながら、狛犬の情報を書き留めています。現地に行って観察しないと分からない情報などもあるので、書きもらさないように注意しています。では、狛犬の特徴を挙げていきます。

耳：立っているもの・垂れているもの・横にのびているものなど様々です。大阪の狛犬（写真Ａ－①）・出雲型（写真Ａ－②）は垂れ耳、岡崎型（写真Ａ－③）・尾道型（写真Ａ－④）は、横にのびていることが多いです。



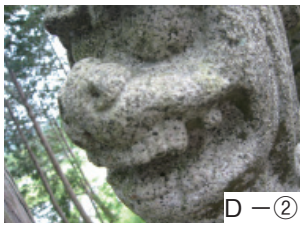
目：丸く周囲をかたどっただけのものや（写真Ｂ－①）、目の中を彫って眼球を描きくわえたもの、着色されたものもあります（写真Ｂ－②）。

鼻：豚鼻・人の様な鼻・団子鼻など、実にユニークな表情を見せてくれます（写真Ｃ－①～③）。



口・歯：口の形、歯の本数などに着目します。口中に玉を入れた狛犬は、出雲型狛犬によく見られる特徴です。口の中を空洞にする際、玉の部分だけ残して彫るため職人の高度な技術を窺わせます（写真Ｄ－①～③）。

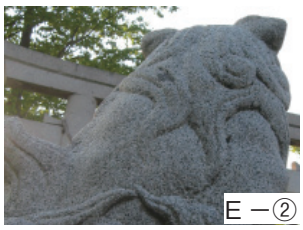
Ｄ－①


Ｄ－②

Ｄ－③

Ｅ－①

たて髪：カール・ストレート・ウェーブなどがあり、細やかな細工に驚かされることがあります（写真Ｅ－①～③）。


Ｅ－②

しっぽ：筆先のような尻尾は出雲型によく見られます（写真Ｆ－①）。蝋燭のような尻尾は、岡崎型です（写真Ｆ－②）。

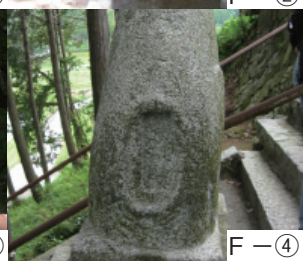
Ｅ－③

扇型は、大阪の狛犬の特徴としてよくみられます（写真Ｆ－③）。はめ込み式なのか彫って尻尾を表現しているのか分かりませんが、珍しい狛犬もいます（写真Ｆ－④）。

Ｆ－①

Ｆ－②

Ｆ－③


Ｆ－④

角：「獅子（阿形）」・「狛犬（吽形）」と分けて考えられていた神殿狛犬の形式を継いでいる大阪の狛犬の吽形に見られることがあります。

Ｇ－①

胴体：唐草文様（写真Ｈ－①）、斑点文様、羽などが体表に描かれています（写真Ｈ－②）。この渦は太陽を表し、吉祥の意味が込められているようです。古代オリエントには、獅子に羽が生えていることからこれが日本に入ってくる段階で簡略化され、ヒレのようなものが描かれるようになったと考えられています[註2]。

Ｈ－①

Ｈ－②

姿勢：座った姿勢（座型）・構えた姿勢（構え型）・玉乗り型などがあります。座型は、大阪の狛犬・岡崎型の基本姿勢（写真Ｉ－①）。構えた姿勢は、出雲型によく見られる形です（写真Ｉ－②）。玉乗り型は、尾道型などに見られる形です（写真Ｉ－③）。

Ｉ－①

Ｉ－②

Ｉ－③

玉取り・子取り：手に玉を持った狛犬（写真Ｊ－①）・子どもの狛犬がじゃれる狛犬（写真Ｊ－②）など作者のこだわりが感じられる部分です。

Ｊ－①　Ｊ－②

台座：台座には、時代・寄進者銘・寄進理由など多くの情報が書かれています。字が読めなくなっているものがあるので、拓本を取ったりカメラの写し方を工夫しています。獅子や、牡丹などが描かれたものもあります。

Ｋ－①

材料：平安時代には木で造られていた狛犬は、江戸時代へ入ると参道に出現し風雨に耐えられる石で造られるようになったようです。使用される石材には、花崗岩・凝灰岩・砂岩などが使用され、岩石以外にも、備前焼・コンクリート・銅・樹脂など様々な材料で、狛犬は形作られています。さて、現在は車などで運搬すれば簡単に運べる石材ですが、江戸時代には運搬するだけで一苦労だったと思われます。こうした事情から、江戸時代の狛犬の中には、地元の石材を使ったものが多数存在しているのだと考えられます。

Ｌ－花崗岩　Ｌ－来待石　Ｌ－凝灰岩　Ｌ－砂岩　Ｌ－備前焼　Ｌ－コンクリート　Ｌ－樹脂　Ｌ－木　Ｌ－銅

種類と型

狛犬を分類すると、大阪の狛犬（大阪・関西地方）・出雲型（島根県）・尾道型（広島県）・岡崎型（愛知県）・江戸獅子（関東地方）など、地域の特色ある狛犬が造られ進化していることがわかります。美作地域では、大阪・島根・愛知・広島・鳥取など各地から狛犬が流入してきています。

大阪の狛犬（写真Ｍ－①）：大阪の狛犬は、形が多種多様であるため形式が定まっておらず、大阪の狛犬とよんでいます。美作地域では、江戸時代後期～明治時代までの古い狛犬に多く見られます。中山神社（津山市一宮）の狛犬は、県下で最古の狛犬であり、大阪の石工が造った狛犬です。大阪の狛犬の特徴を挙げると、垂れ耳・横広の鼻・団扇状の尻尾・前足は、太く短く、たてがみが螺髪のように回転しています。姿勢は、座形が基本で、顔は縦長で彫が浅く、目の中に彫り込みがあり、鬼面・人面に近い印象です。また、「獅子・狛犬」の形式を踏襲している為、吽形の頭部には角があるものがあります。花崗岩で造られたものが多いなどの特徴を挙げることができます[註3]。

出雲型（写真Ｍ－②）：出雲型狛犬は、島根県松江地方で採れる来待石で造られた狛犬です。細かな細工が可能な砂岩で、耳が長く、尻尾は筆先のような形をしています。構形と座形と姿勢が２パターンあります。美作地域には、来待石ではなく地元の石材で造られたものが多数所在しています。これは、明治時代までは、来待石の藩外への搬出が禁止されていたためと考えられています。砂岩であるため風雨に弱いところもあります[註4]。

尾道型（写真Ｍ－③）：尾道型狛犬の特徴は、長く伸びた鋭い犬歯を持ち、尻尾は刺々しく逆立ち、耳が横に大きく突出するもので、座形・構形・玉乗り形の３タイプがあります。また、美作地域には、小豆島の石工が入ってきており、出雲型・尾道型と大阪の狛犬をミックスしたような狛犬を造っています[註5]。

岡崎型（写真Ｍ－④）：岡崎型狛犬は、愛知県の岡崎地方で誕生した狛犬です。神殿狛犬の様式を踏襲したもので、酒井孫兵衛（６代目）という石工が岡崎型の造り方を大工仲間に教えたため、大正から現在にかけて多く分布するようになりました。美作地域にも酒井孫兵衛の作品が奉納されています[註6]。

Ｍ－①

Ｍ－②

Ｍ－③

Ｍ－④

変わり狛犬：狛犬が徐々に画一化されていく中で、我が道をいく狛犬もあります。

おわりに

今回は、狛犬を観察する時の着眼点を挙げ、美作地域に所在する狛犬を紹介しました。

美作地域の狛犬という身近なものから、深く地域の歴史や文化を知ることができました。狛犬に限らず、今まで目を向けられていなかったものに着目することで違った角度から歴史を研究することができるとわかり、その大切さが分かりました。また、私の他にも狛犬を研究している方は多数おられ、狛犬の研究会へ参加する機会を得ました。県内・外の研究者の方たちと交流することができ力強く感じました。一人でも多くこうしたものに興味を持たれる人が増えると文化財の保護などを考える人も自然と増えるのではないかと期待しています。

註

1 『年報　津山弥生の里　第 17 ～ 20 号』田渕千香子　2010 ～ 2013 年　津山市教育委員会
2 『日本全国　獅子・狛犬ものがたり』上杉千郷　2008 年　戒光祥 p.126
3 『日本全国　獅子・狛犬ものがたり』上杉千郷　2008 年　戒光祥
4 『年報　津山弥生の里　第 19 号』田渕千香子　2012 年　津山市教育委員会
5 『倉敷の歴史　倉敷市総務局総務部総務課第 20 号』「狛犬石工銘に関する考察　その二　徳松と吉松」藤原好二　2012 年
6 『年報　津山弥生の里 17 号』田渕千香子　2010 年　津山市教育委員会

印　刷　仕　様

紙　　質	表紙	レザッククリーム　175kg
	本文	ニューエイジ　90kg
Ｄ　Ｔ　Ｐ	ＯＳ	Windows 7　Ultimate
	DTP	Adobe　Indesign　CS4
	図版作成	Adobe　Illustrator　CS4
	写真調整	Adobe　Photoshop　CS4
	Scanning	35㎜・6 × 7film　EPSON　GT － X 970
		図面類　GRAPHTEC　IMAGESCANNER　TS7000
使用 Font	モリサワ	OpenType　基本７書体（じゅん Pro、リュウミン ProL-KL、見出ゴ MB31Pro、見出ミン MA31Pro、太ゴＢ 101Pro、太ミン A101Pro、中ゴシック BBBPro）
画 像 原 稿	階調画像線数は 175 線	
印　　刷	印刷所へは、ＰＤＦ　Ｘ－ 1a（2001）で書き出して入稿	

年報　津山弥生の里　第 21 号（平成 24 年度）

2014 年３月 31 日発行

発行　津山市教育委員会
文化課　津山弥生の里文化財センター
〒 708 － 0824
岡山県津山市沼 600 － 1
TEL0868－24－8413　FAX0868－24－8414

印刷　廣陽本社